

タイトル「心を伝えるプロジェクト」

ねらい「被災地の中学生を励ますこと」

## 1 内容

- (1) 被災地訪問及び学校交流
- (2) 食糧支援のための農園活動
- (3) 募金活動
- (4) 他県・海外からの支援の橋渡し
- (5) その他（プロジェクト立ち上げに係る授業提案）

## 2 対象

田野畑村立田野畑中学校、岩泉町立小本中学校

## 3 復興教育の視点

為すことによって学ぶ「実践第一」の考え方にに基づき、教育活動のあらゆる場面で岩手の復興に向け自分が何を為すべきかを生徒が自ら考え、自主的に行動できるように仕組む。

## 4 実践紹介

## (1) 被災地訪問及び学校交流

平成23年10月に初めて田野畑村を訪問。被災地の現状を目の当たりにするとともに、田野畑中学校との交流を行い、今後の支援活動の見通しを立てた。また、同年11月には田野畑中学校生徒有志の訪問を受け入れ、互いに交流を深めた。

平成24年7月に二度目の田野畑訪問を実施し、津波語り部の話に耳を傾けたほか、田野畑中学校との交流を実施。また、同年10月には葛巻町内3中学校が協力して田野畑中学校を迎え入れ、葛巻中学校体育館にて合唱メインの交流会を実施した。

## (2) 食糧支援のための農園活動

震災直後の平成23年5月から2ヶ年にわたり、被災地の食糧支援を目的とした農園の整備に取り組み、生徒達が栽培・収穫した野菜類を、田野畑中学校や小本中学校へ送り届けた。

農園の整備や作物の栽培にあたっては、地域の方々から様々な指導・支援をいただき、地域ぐるみでの支援活動となった。

## (3) 募金活動

震災直後の平成23年4月、宿泊研修で角館市を訪れていた2年生が、被災地支援のための募金活動を実施。収益は葛巻町社会福祉協議会を通じて復興支援のため役立てていただいた。

また、平成24年4月には、修学旅行で東京都を訪れていた3年生が都内で募金活動を行った。収益は、同年7月、田野畑中学校を訪問した際に、生徒会長から生徒会長へ手渡した。



「被災地訪問」NPOの語り部から津波の被害について説明を受ける江刈中学校の生徒達。 H24. 07. 18



「合唱交流」葛巻町内3中学校との交流で見事な合唱を披露した田野畑中学校の生徒達。 H24. 10. 10



「江中農園」被災地への食糧支援のためジャガイモの植え付けを行う江刈中学校の生徒達。 H24. 05. 14



「募金活動」東京築地東劇ビル前で被災地支援募金の呼びかけを行う江刈中学校の生徒達。 H24. 04. 19

## (4) 他県・海外からの支援の橋渡し

平成 23 年 5 月、沖縄県八重瀬町立東風平中学校から「生徒が描いた沖縄の花の絵を被災地へ送り、現地の人々を励ましたい」との申し出があり、たくさんの絵が江刈中学校に送られてきた。

この依頼を受け、同年 10 月、田野畑中学校を訪問した際に、生徒会長が絵を手渡し、ぜひ地域住民にも配付し、仮設住宅に飾って欲しいと伝えた。

また、同年 12 月には、ウィーン日本人会からも被災地を支援したい旨の申し出があり、県内 5 小中学校に電子ピアノを寄贈する際の橋渡し役を務めた。本校にも電子ピアノをいただいたので、そのお礼として、全校生徒の出演によるビデオレターを製作し、ウィーンへ送った。



「プレゼント」支援橋渡しのお礼にウィーン日本人会から名物チョコが贈呈されました。 H23. 12. 22

## (5) その他（プロジェクト立ち上げに係る授業提案）

心を伝えるプロジェクト立ち上げの契機となったのは、平成 23 年度本校第 3 学年の生徒と学級担任であった。震災直後から被災した仲間を想い、押し付けではなく、被災校が真に必要としている支援を考え、行動に移すことをモットーとし、被災校のニーズを調べるための調査活動や現地訪問などを行った。

平成 23 年 6 月には、葛巻町特別活動研修会の会場校となり、プロジェクト立ち上げのための特別活動の授業提案を行った。



「コンサート」ウィーン在住日本人ピアニスト樋尾さん御夫妻による復興支援コンサート。 H24. 02. 29



「特別活動授業」被災校が真に必要としていることは何かを探る江刈中学校の生徒たち。 H23. 06. 06

## 5 生徒の感想

## ◆最も心に残った取組は何ですか？

- ・被災地訪問。被災地の皆さんの恐怖や痛みが伝わり、内陸にいる自分達より苦勞していると思った（1男）
- ・合唱交流。田野畑中の合唱はとても凄くて、伝えたいという気持ちが入っていた（1女）
- ・部活動交流。試合で交流し、その後、カレーを作ったり食べたりして、さらに交流が深まった（2男）
- ・農園活動。被災した仲間を想い、野菜を一から育てて送るなど、一番やり遂げた気がする（3女）

## ◆活動を通してどのような感想を持ちましたか？

- ・自分達も誰かの力になれるということを実感した。これからもこのような活動を続けたい（3男）
- ・自分に何ができるか不安だったけど、プロジェクトを通して自分の気持ちを届けることができた（3女）
- ・企画の段階から自分達で考えを出し合い、去年よりも更に生徒主体の交流会ができた（3女）
- ・被災地に行ってみて、津波の怖さを実感した。心を伝えるプロジェクトをずっと続けていきたい（2女）

## 6 終わりに

本校では、震災直後の平成 23 年 4 月から、復興に向けた様々活動に取り組んできました。取組を通して、生徒の心の中に有形・無形の「心の財産」が生まれたように感じます。これからも「心の教育」を大切にしながら、職員一丸となって復興支援に取り組んでまいります。



他地区・他校との交流	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>被災地（山田町）を訪れ、震災時の状況や復興の状況を知ることで、震災を忘れないようにする。</li> <li>山田中との交流のあり方や岩手の復興に向け、自分達に出来ることは何かを考える機会とする。</li> </ul>
------------	-----	---

【題材】 絆プロジェクト ～山田町訪問研修～

【対象】 ○前期生徒会執行部、専門委員長（7名） ○後期生徒会執行部、専門委員長（14名）

○2・3年学級代表（7名）

【復興教育の視点】 絆 ～ かかわり愛・ささえ愛 ～

この震災、震災後の自分たちの生き方を考えるには、まず震災を忘れないこと、そして私たちが未来に向けて何ができるかを本気で考えることが必要だと考えた。そのために、まずはボランティアや交流など、体験することを通して学ぶこととした。

【実践の内容】

<日程>

7:15	学校出発（葛巻・岩泉経由）	13:00	被災地ボランティア活動<記録③>
10:30	被災地見学（田老・宮古）<記録①>	14:30	現地出発（宮古・盛岡経由）
11:30	復興についての学習会<記録②>	18:30	学校到着

<実践の記録①>

### 被災地見学（田老・宮古）

- バス移動の際に、車内で宮古市田老地区と宮古市街地を見学し、震災後の被災地の様子を見学した。
- バスの中で、被災地見学の事前学習として、被災地（宮城県）での復興に向けた活動とその支援プロジェクト（プロフェッショナル仕事の流儀より：NHK）についてDVDを用いて学習した。

生徒の感想①

- 想像と全く違っていた。言葉を失った。がれきの山を見た時、一番それを感じた。

生徒の感想②

- 普通の景色がある所を境に一変した。当時はもっとすごかったんだと思う。

<実践の記録②>

### 復興についての学習会

- 山田町社会福祉協議会のご協力により、講演会を実施した。講師に菊池清太陸中海岸青少年の家所長をお招きし、震災の様子や避難生活の様子を写真や実体験をもとに分かりやすく説明いただいた。また、中学生として期待すること、避難する際の心得についてもお話いただくことができた。



生徒の感想③

- 想像を超えていた。お話を聞きながら、震災の時の状況を考えたが、経験した人でしか分からない思いがあったと思った。講演を終えて、みんなに今の様子や聞いたことを伝えていかなければならないのではないかと改めて感じた。

<実践の記録③>

被災地でのボランティア活動（被災した土地の再生）



※ 活動内容について説明を受ける

今からこの場所の作業をはじめま〜す！

根がしっかり生えていて、草を抜くのにとても力があるね。

みんな、お疲れ様！！  
少しは山田町のために役に立ったのかな〜？

ようやく3mぐらい前進。ふう〜、大変。でも、このがれきの小ささでは、機械は無理！人の手も必要だね。



※ 草を取り除く作業



※ 作業から1時間経過



※ 小さながれきを見つけ、取り除く

生徒の感想④

- ・一生懸命取り組みました。少ない時間でしたが、草取りやがれき撤去を進めることで、少しでも復興に役立っていればいいなと思いました。
- ・とても疲れました。だけど、通りすがりの人に「ありがとう」や「お疲れさま」と声をかけてもらいました。この人達のために「頑張りたい」、「何かやりたい」と思いました。

【実践後の感想】

- ・今回の研修では、被災地の現在の様子を知ったり、ボランティアを出来てよかったと思う。復旧・復興の道のりはまだまだと思った。その中で、自分達は沼中で出来ることを精一杯やっていくことが大切だと思いました。
- ・沿岸の復興のために自分ができることをやっていきたいと思った。同じ日に震災を経験しながらも、初めて知ったことや学ぶものがたくさんあった。良い経験になりました。



研修後の取り組みと今後の活動に向けて

- ・交流をしている山田中への「復興支援」の想いを伝える。  
(全校写真をパネルにして送る予定)
- ・山田に向けた「絆プロジェクト」の内容を検討する。



総合的な学習の時間	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災を実際に体験された方の貴重なお話しを聞き、当時の現地での様子を知るとともに、今後の自分の行き方に活かす。</li> </ul>
-----------	-----	--

【題材】 復興教育に関わる講演会

【対象】 紫波町立紫波第一中学校 1～3学年生徒 (723名)

【復興教育の視点】

- 震災津波と向き合い、講師の方の体験談を「教材」とし、生徒の「生きる力」を育む。
- 郷土を愛し、その復興、発展を支える人材を育成する。

【実践の概要】

(1) 復興教育に関わる講演会の設定

東日本大震災を実際に体験された方を講師に招聘し講演会を設定した。生徒に主体的に講演会に臨んで欲しいという願いから、会を3つの段階に区切って内容を工夫し、対話型の講演会とした。

(2) 振り返りの場面の設定

講演会終了後、4つの視点(①震災当時の映像を見て、②講師の方のお話しを聞いて、③生徒と講師の方の質疑 応答を聞いて、④今後の自分の生活に活かしたい事)を設定し、感想をまとめた。



【復興教育に関わる講演会の様子】

【実践の詳細】

(1) 復興教育に関わる講演会

- ① 日時と場所 平成24年11月19日(月) 5・6校時 紫波第一中学校 体育館
- ② 演題と講師 消えた街 -陸前高田市を襲った津波-  
岩手日報社 学芸部次長 鈴木 多聞 氏

〔 H23年度まで岩手日報社陸前高田支局長を務め、当時、現地で東日本大震災を体験した。〕  
報道機関従事者の立場から震災を語ることができ、中学校での講演の経験もある。

③ 内容

会の冒頭に東日本大震災に関する映像を視聴したうえで講師の方のお話しを聞き、途中から生徒の質問に答えていただく、対話型の講演会とした。

④ 展開

次第	時間	具体的な内容等
1 開会の言葉	13:40	・ 13:20廊下整列、移動
2 学校長のお話 (講師の紹介)	13:41	服装：制服 隊形：全校朝会隊形
3 講演 ・ DVD視聴 ・ 講師の方のお話 ・ 質疑応答	13:45～ 10分 10分 10分	・ 最初、東日本大震災の様子(DVD)を視聴し、その後講師先生のお話しを聞き、さらに生徒の質問に答える。
4 生徒お礼の言葉	14:20	・ 終了後、体育館から教室へ移動し教室で講演会の感想を記入する。
5 閉会の言葉	14:25	



【講師の方のお話し】



【当時の陸前高田市の様子】



【講演会での生徒の様子】

(2) 講演会の中での質疑応答

生徒達に主体的に講演会に臨ませるために、事前に講師の方への質問を考えさせ、質疑応答の時間を設定した。

生徒が考えた質問

- ・ 復興はどのくらい進んでいるのですか。また、私達が復興のためにできることは何ですか。
- ・ 震災直後の取材で、必ず気をつけていたことなどはありますか。
- ・ 震災を経て考え方など何か変わったことはありますか。 等



【質問しようと並ぶ生徒達】

【生徒の感想】

・ 私は被災地に行ったことがないので、その悲しい状況を実際に見たことはない。だが、今日DVDを改めて見て、何だか心が痛んだ。自分の地域は軽い被害ですんだけど、それでも不便な生活になった気がして不満をいっていたような気がする。被害が大きかった被災地はもっと大変な思いをしたり、とても悲しい経験をしてしまった人が大勢いたのだ、という事を自分の頭に一生忘れてはいけない記憶としておいておかないと思った。(3年女子)

・ 今日の講演会を聞いて、震災はやはりとても怖いと思った。というのも、震災によって変わり果てた風景を見たり、物資の足りなさや親族や友達が震災の被害にあったり、亡くなったりするのを想像してみるとやはりとても怖かった。もし、自分が被害にあったら平然と過ごしていけるかとか、もし友達や家族が亡くなったりしたら自分はどうするだろうかなど、とてもたくさんの事を考えさせられる講演会だった。これから生きていく上で被災した人の事を忘れず、様々な事に対して、当たり前ではないという気持ちで生活していきたい。(3年男子)

・ 母の実家が宮古で震災後も何度か訪れている。親戚に宮古の市庁舎に勤めている方がいて、そこから撮ったあの日のDVDを見せてもらったことがある。また、大槌町も訪問した。津波が何もかも流し去るのはあつという間のことで、人の営みなんて自然の力の前ではとても脆いものなのと思った。今日観たDVDでは、緊迫した状況がとても伝わってきた。今、復興は全然進んでいないとのことだ。一刻も早く以前のように笑顔で過ごせられるような社会に戻ってほしい。震災はとても多くのものを奪っていったが、大切なことに気づかせてくれた。(3年女子)

【まとめ】

- ・ 東日本大震災を体験した方のお話しを聞き、取材した当時の映像を観ることにより、現地での実際の様子を知るよい機会となった。
- ・ 生徒達が疑問に思っていることについて講師の方との質疑応答場面を設定することにより、一層復興教育への意識が高まり、自分達の生活へ活かそうとする意欲がみられた。



防災教育	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大地震の発生メカニズムや防災についての知識を深める。</li> <li>・大地震の際の防災について、防災カードの作成を通して考えさせる。</li> </ul>
------	-----	---

【題材】 防災カードの作成

【対象】 紫波町立紫波第一中学校 1～3 学年生徒 (723名)

【復興教育の視点】

- ・ 地震や津波についてそのメカニズムを正しく理解し、共通認識をもつ。
- ・ 自分で情報を把握し、判断するといった思考力、判断力及び実践意欲を育成する。

【実践の概要】

(1) 防災カードの作成とその活用

防災カードは、大地震等の非常時の際に必要となる情報を記録することができ、生徒に常時携帯させるカードである。カードの様式や活用方法を検討し、本校独自の防災カードを作成しその活用に努めた。

(2) 防災教育に関わる全校集会の設定

全校生徒を対象として、全校集会を設定した。内容は、DVD視聴(大地震発生ー東日本大震災 阪神・淡路大震災から学ぶー)と防災カードの説明、今後の取り組みについてであった。



【防災教育に関わる全校集会の様子】

【実践の詳細】

(1) 防災カードの様式

非常時の際に有用となる情報をカードにあらかじめ記入しておき、有事に備えることとした。個人データも含まれるため、二つ折りとし、カード内側には、住所、氏名等の「私のデータ」、と万が一の際の「避難場所(逃げる場所)」「もしもの時の連絡先(氏名・連絡先)」を記入できるようにした。また、常時携帯を基本とするため、カードの大きさは、二つ折りにして生徒手帳に入る程度とした。

(2) 防災教育に関わる全校集会

① 日時と場所

平成24年11月1日(木)  
3校時 紫波第一中学校体育館

② 内容

- ・ DVD視聴  
大震災発生ー東日本大震災、阪神・淡路大震災から学ぶー
- ・ 防災カードの説明と今後の指導

<p>(7/24更新) 1211-ゲムトラの緊急避難カード Oll-1冊 冊 811-1冊 冊 冊 ゲムトラの緊急</p> <p>「くまのまももらおむし」が助かるお助けカード 「まももらおむし」が助かるお助けカード</p> <p><b>防災カード</b> 避難中一週前まで有効</p>	<p>私のデーター家族で話し合って記入しましょうー</p> <p>姓 名 _____</p> <p>住 居 _____</p> <p>T E L _____</p> <p>おかけつけ電話番号 _____</p> <p>避難場所 室 _____</p> <p>使用している地図 _____</p>
<p><b>安全に避難するポイント</b></p>	<p><b>避難場所(逃げる場所)</b> ーあらかじめ家族で決めておきましょうー</p> <p>家 族 全 員 集 合 場 所 _____</p> <p>家 族 全 員 集 合 場 所 _____</p> <p>家 族 全 員 集 合 場 所 _____</p>
<p>■避難する時</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 避難する前に火元のチェックをする。(ガスの元栓、電気のブレーカー)</li> <li>- 避難先を置いて玄関先に立ち、確認する。</li> <li>- 荷物(小銭、メモ用紙)を持って、歩いて避難する。</li> <li>- 避難途中で倒れている人を見かけたら、助けよう。</li> </ul> <p>■避難先では</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 率先してボランティアとして活動しよう。</li> </ul>	<p>もしもの時の連絡先(氏名・連絡先)</p> <p>① _____ (TEL: _____)</p> <p>② _____ (TEL: _____)</p> <p>※家族の集合場所ー避難時に家族が持ち合わせる場所 ※家族の避難場所ー決めた避難先に行くー避難場所</p>

【防災カード(外側)】

【防災カード(外側)】

③ 展開

次第	時間	具体的な内容等
1 開会の言葉	10:50	・ 2校時終了後、廊下整列、移動
2 学校長のお話	10:51	服装：運動着、隊形：全校朝会隊形
3 DVD視聴	10:55	・ DVDは約20分の内容
4 防災カードの説明	11:15	・ 防災カード配布の趣旨、使い方等の説明
5 閉会の言葉	11:20	下書き→清書→生徒手帳に入れ、携帯



【地震発生のメカニズムの説明】



【防災カードへの記入の仕方の説明】



【集会での生徒の様子】

(3) 防災カードに関わる学級指導

防災教育に関わる全校集会終了後、教室で学級担任より防災カード下書き用紙を配布し、追指導を行った。特に、記入にあたっては、家族と話し合っ て決めることとし、次週までに下書き用紙を学級担任に提出させた。学級担任は、生徒の防災カード下書き用紙をチェックした後、学活の時間を活用し、清書させた。清書したカードは、各自が生徒手帳に収め、常時携帯するよう指導した。

私のデータ — 家族で話し合っ て記入しましょう—	
名前	_____
住 所	岩手県紫波町 _____
TEL	019 _____
かかりつけ病院	_____
血液型	_____ 型
使用している薬等	_____
<b>避難場所(逃げる場所)</b> — あらかじめ家族で決めておきましょう—	
家族の集合場所	家
家族の避難場所	上通り公民館
もしもの時の連絡先 (氏名・連絡先)	
①	母 (TEL: 090( ) )
②	父 (TEL: 090( ) )
※家族の集合場所 → 災害時に家族で持ち合わせる場所	
※家族の避難場所 → 自分の家族が行く一時避難場所	

【生徒が記入したカード】

【生徒の感想】

・ 今日の学習では、大地震の対策として、耐震工事、命を守る行動、コミュニティ活動、情報の確保の四つのが大事であることがわかった。DVDにも出てきた 防災カードを紫波一中でも作成することになり、自分で自分のことを守っていかなく なければならないということを改めて感じました。家族との絆も大事ですが、何か起きた時には、この防災カードを活かして人とのつながりを大切にしていきたいです。(3年男子)

・ 地震が起こるメカニズムがよくわかり、東日本大震災がどのようにして起こったのかがわかりました。学校から防災カードが配られました。私は、家族と話し合い、もし大地震がきたときの集合場所や避難場所を決めました。防災カードを作り、そのカードを生徒手帳に入れた時、なんか安心した気持ちになりました。(1年女子)

【まとめ】

- ・ 全校集会を設定することで、地震が起こるメカニズムやその後の行動の仕方(命を守る行動、コミュニティ活動、情報の確保)等をしっかり学ぶことができた。
- ・ 本校独自の防災カードを作成し、生徒一人ひとりが家族と話し合い必要事項を記入し、そのカードを携帯することで、防災への意識が高まった。



<p>学校間交流 交流会</p>	<p>ね ら い</p>	<p>絆◎共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちを持って、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる</p>
<p>【題材】 奥州市立東水沢中学校と大船渡市立大船渡中学校との交流会</p> <p>【対象】 東水沢中学校と大船渡中学校の3学年生徒</p> <p>【復興教育の視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実際に交流校を訪ね、被災した仲間との交流から、絆” ところのつながり” を深め、感謝の心や思いやりの心を育てる一助とする。</li> <li>・ 被災地の様子を自分の肌で感じとらせ、被災された人からの体験を聞くことで、復興に向け自分にできる行動（立ち位置）を考えさせる一助とする。</li> </ul> <p>【実践の概要】</p> <p>1 東水沢中学校と大船渡中学校3学年生徒の交流会</p> <p>(1) 各学校紹介と一年間の活動の紹介</p> <p>(2) 各学校の合唱発表と合同合唱</p> <p>(3) エール交換</p> <p>2 被災体験の講話と被災現地の訪問</p> <p>(1) 被災した体験と今の被災地の現状についての講話</p> <p>(2) 被災した現地の訪問</p> <p>【実践の詳細】</p> <p>1 東水沢中学校と大船渡中学校3学年生徒の交流会</p> <p>(1) はるかのひまわりの交流</p> <p>平成23年度の交流会で、被災地の大船渡中学校より「はるかのひまわりの種」を7粒贈られた。東水沢中学校では”はるかのひまわり”の種を、3学年生徒会が引き継ぎ、5月に校舎前の花壇に播種。美術部や有志生徒の協力で環境づくりが進められ、すくすくと成長し大輪を咲かせた。</p> <p>また、生徒総会でも大船渡中からの贈り物であることと、心のつながり”絆”を深める活動であることを確認し、毎年3学年生徒会が引き継ぎ、大船渡中学校と交流の際に報告を続けることとしている。加えて、文化祭の発表部門を利用して、全校生徒、保護者の皆さんや地域の皆さんの前で発表することとしている。</p> <p>(2) 各学校の合唱発表と合同合唱交流</p> <p>入場の時に渡された、一人ひとりのメッセージが書いてある葉など、この交流のために準備してくれたと思うと温かい気持ちが伝わってきた。</p> <p>大船渡中の「名づけられた葉」の合唱は、すごく迫力があって、特に男子の声がよく響いていてとても素晴らしい合唱であった。後のエールや合同合唱「大地讃頌」で東中と大船渡中の交流が一層深まった。</p> <p>2 被災体験の講話と被災現地の訪問</p> <p>(1) 被災した体験と今の被災地の現状についての講話</p> <p>日時 平成24年9月27日（木）</p> <p>場所 陸前高田市立米崎中学校</p> <p>講師 校長 阿部 重人 先生</p> <p>被災地の様子を自分の肌で感じるとともに、被災された人からの体験を聞くことで、復興に向けて自分にできる行動（立ち位置）を考え、社会とのかかわりを通してどう生きるかを考える時間とした。</p>		



## (2) 被災した現地の訪問

阿部校長先生の先導で、被災した建物を案内して頂いた。

## ＜高田高校＞

車窓から、窓ガラスがほとんど残っていない高田高校の校舎を見た。3階まで水が上がったことが見てわかった。



## ＜陸前高田市民体育館＞

生徒はバスを降り、阿部校長先生のお計らいで内部に入らせていただいた。体育館の2階席に立ちアリーナを見下ろすと、そこにはまだたくさんの生活用品やがれきが残っていた。当時の様子を聞き、被害の大きさを実感した。あまりにも悲惨な光景を目の当たりにし、涙を流す生徒の姿も見られた。体育館入口に設けられていた祭壇で、手を合わせて犠牲者の冥福を祈った。



## ＜陸前高田市役所および合同庁舎＞

バスを降りて市役所駐車場で説明を聞いた。どちらの建物に避難するかによって生死を分けたということ、かろうじて助かったものの、寒い中市役所の屋上で何時間も救助を待つことになった人々の様子を聞き、改めて自分たちの命が生かされているということを感じた。

見渡す限り雑草に覆われた高田の風景は、想像以上に生徒たちに衝撃を与えた。また、過酷な被災体験のお話と前向きな姿勢は生徒たちの心を揺さぶるものだった。

## 【生徒の感想】

私はたった一日の短い中で、一生忘れることのない大切な時間を過ごすことになった。まず一つ目は、大船渡中学校との交流の時間。私は最初、バスから降りて体育館に向かう途中にたくさん建ち並び仮設住宅を見た。ここで何人もの人が地震による恐怖や悲しみを抱きながら生活していたのだと思った。大船渡中の皆さんもつらい思いをたくさんしていると思うが、そこから立ち直っていこうという思いが合唱から伝わった。同じ中学生として、そんな姿に励まされ、「負けていけない」と思えた。地震当時、私たちは別々の状況に置かれていた。しかし、今こうして交流の機会をもって、被災地の中学生と深くつながれることをうれしく思う。また、交流の証である「ひまわりの種」を後輩へと受け継いでいくことが私たちのすべきことであると感じた。交流会はわずか1時間ほどの短い時間ではあったけれど、最後バスで去るとき、大中生が手を振ってくれて、感謝とあたたかい気持ちで胸がいっぱいになった。

米崎中学校の校長阿部重人先生からは、ご自身の体験を映像や写真を交えて語って頂いた。実際に被災した人からの話というのはとても心に響き、目をそむけたい現実にも真摯に向き合っている姿を見ると、涙が出そうになった。家族の兄弟の話や、遺品の話、震災当初のことなど残酷な現実を私たちに話して頂き、本当にありがとうございました。話をしていただいた。

実際に被災した陸前高田市の市役所、市民体育館などを回った。見て言葉を失った。あまりに悲惨な建物を見て、心が痛んだ。そこで何人の人が亡くなったか、想像するだけで胸が痛くなった。この訪問を通して、まだ震災のために心に深い傷を負った人がいること、まちがまだ復興していないことを学んだ。私にできることは少しだけど、これから自分にできることを見つけ、沿岸部が早く復興できるように支援していきたい。

## 【まとめ】

大船渡中学校との交流会を実施するにあたり、現地の被害状況について写真や生徒作文等を資料にして事前学習を行い、少しでも大船渡中学校の生徒を勇気づけたいという思いをもって交流会に臨んだ。大船渡中学校の生徒は明るく活気があり、優しさにあふれ、心を揺さぶるすばらしい合唱と力強いエールで私達を圧倒した。その姿から、懸命に生きる強さと他者への思いやりを学ぶことができた。その後の本校生徒の合唱や学級新聞、被災地訪問報告会の内容から、生徒たちの思いやりや感謝の心が育っていると感じている。

また、今回の大船渡中交流と、復興に向けた活動をしている方からの現状についての講話により、生徒一人一人が様々なことを感じ、復興に向けて自分ができる活動を前向きに考えられるようになったことは有意義であった。指導の継続により、被災地で学んだことをまとめ、地域での心のつながりや地域において中学生にできることなどを考えさせていきたい。





現地でのボランティアと復興支援バザー	ね ら い	①沿岸被災地で活動することから、自分たちにできることを考える。 ②現地の方々からお話を聴き、「生きる」ことについて考えを深める。 ③活動するなかで、人の温もりにふれ、人の心を学ぶ。
--------------------	-------------	--

【題材】 現地でのボランティア活動から復興支援バザーの実践へ

【対象】 第2学年（158名）

### 【復興教育の視点】

「復興教育」と言っても、何をどうやればいいのか、手探りである。行動することから始まる。行動しなければ、何も始まらない。活動しながら考え、考えながら活動する。沿岸被災地で活動し、学び、考え、中学生の自分たちができる範囲で、できる支援を組み立てて行くことを大切にしたいと考えた。「気負わず、無理せず、息長く」のコンセプト。

### 【実践の概要】

「復興教育」と言われても、何をどうしたらいいのか、さっぱり見当がつかなかった。学年会で話し合い、とにかく現地に行き、見て、話を聴こうということになった。高田で被災した方々の話を聴かせていただき、帰校後に学級ごとのまとめを交流し合う学年報告会を持った。その時に、自分たちにできることの少なさに気付くとともに、これならできると提案された中の1つが、訪問した障がい者自立支援施設などで作っているものを、文化祭で売って益金を送る「復興支援バザー」であった。取り組みは生徒会全体の活動に広がり、生徒たちは、やっと少し役に立てたという実感を得た。

### 【実践の詳細】

訪問先は、学級毎に、「すずらんとかたつむり」「青松館せせらぎ」（ともに障がい者自立支援）、矢作保育園、神田葡萄園の4つに分かれ、被災時の状況や、現在に至るまでのご苦労などを学ぶとともに、作業などのお手伝いをしてもらうことにした。

訪問先の決定については、当初自分たちで探したが、1学級40人を雨天でも受け入れることが可能な収容施設を持つことなどの条件をクリアする訪問先を、被災地に見いだすことは困難だった。そこで、1年生の時に取り組んだ、宮古市の仮設住宅地域に励ましのメッセージと絵を描いたプラントーを送る際にお世話になったNPOの及川さんにお願ひし、コーディネートしていただいた。

「大きな地震を感じ、葡萄園裏の丘に登ると、黒い煙の向こうから津波が押し寄せてくるのが見え、眼下の国道を津波の方向に走っていく車が見えた」「避難した小屋に家族皆が泊まるので、津波も何も分からず、1歳の娘ははしゃいでいたが、葡萄園を再建できるか、虚脱感に支配された」と話す神田葡萄園の熊谷さん。「どうやっ



【宮古へ送るプラントーづくり】

【釜石東との部活交流会】



【神田葡萄園での活動】

【青松館せせらぎでの活動】





て立ち直ることができたのですか」という生徒の質問に対し、「はしゃぐ娘を見て、がんばらねばと、強く思った」と語り、春に津波を被った葡萄の枝に若葉が出た時は、その生命力に勇気づけられたこと、再建を願う従業員の方々や全国のお得意様の応援に支えられたことなどを教えていただいた。

「すずらんとかたつむり」では、Sさんに大変辛い体験を伺った。消防団のSさんは、大津波が押し寄せ中、逃げ遅れたお年寄りを背負って、山に向かって走った。しかし、とうとう津波が背後に迫り、「このままでは津波に呑まれる」と直感し、葛藤と逡巡の中「俺は生きねばならん」という気持ちが、雷のように起こって、そこにお婆ちゃんを置いて、間一髪難を逃れた。「おまえは消防団なんだぞ！」と批判する仲間に、Sさんは「俺もいっしょに死ねばよかったのか！」と叫んだのだそうだ。生徒たちは、ここに生きる、生きているということの真実のようなものを感じたようだったが、それをどう言ったらよいのか、言葉に表せないようだった。遺体捜索の実際も聞いた。そのほかの訪問先でも、さまざまなことを学んできたが、学年交流報告会で「私たちにできることはと尋ねたら、この津波のこと、ここで見たこと、聞いたことを、どんどん広げてください。そして、忘れないでください」と託ってきたとの報告があった。



【文化祭での沿岸支援バザー】

この「KANECHU ACTION IN TAKATA」で、障がい者の作業所で手伝った生徒や先生が、「文化祭でバザーみたいなことをやれたら、この商品を売らせてもらえないか」と訊いたら、喜んでくださった。そういうことから、文化祭でバザーに取り組むことになった。しかし、これは学年だけではできない。そんな折、生徒会から来年度、さらに次の年度と展望して取り組んでいくための「復興支援プロジェクトチーム」を立ち上げるという話があり、そこに参加する2学年メンバーから、このバザーに生徒会として取り組んでもらえないかと話すと、快諾を受けた。さらに現金を扱うため、PTAの協力も取り付け、地元紙に広告を掲載してもらったり、地域の商店にポスターを貼らせてもらったりして、当日を迎えた。バザーは大盛況で、一日目で商品がすべて売り切れそうになり、放課後高田まで商品を仕入れ直しに行った。

- ・陸前高田は、ほんとに何もなくなっていました。そんな中で、たくさんの人達が「一生懸命生きている」私は食べたりするのが当たり前だと思わなくなりました。被災地の人の気持ちを考えていく中で「自分も何かしたい！」と、前より強く思うようになりました。
- ・沿岸支援バザーは、沿岸の方々の作ったものを売ってお金で支援するだけでなく、お金とともに気持ちも届けることができたと思います。沿岸の人のためにもなったけど、自分たちのためにもなったと思います。



【釜石東との交流会での男子による鬼剣舞】

動くことで、出会いが生まれ、つぎの行動が見えてくる。「まず、動こう」ということが、私たちが学んだことの1つであろうか。このほかに、3年生が大船渡の合足海岸で瓦礫撤去などに取り組んできた。夏休みには、釜石東中との部活動交流会が「岩手の未来をつくる仲間の集い」として行われ、秋に第2回ということで2学年の「学年交流会」が開かれた。釜石の生徒に会う度に、本校の生徒はその明るさ、そして津波のことも包み隠さず話してくれる強さに圧倒される。いつも、元気と勇気をもらうのは私たちである。出会いにより、人間観・人生観に小さな変化が表れた者もいる。これまで出会ったたくさんの方々に感謝しつつ、生徒たちは修学旅行に向け、『いつかこの海を越えて』という釜石東のためにつくられ、彼らが歌ってくれた合唱曲に取り組んでいる。①～③のようなねらいには、迫りきっていない。「まとめ」はまだまだ先である。



キャリア教育 地域との交流 学校の特色を生かした取組	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒や地域の実態を十分に踏まえ、創意工夫を生かした特色ある学校作りに努める。</li> <li>・地域の産業であるわかめの養殖や加工販売体験、環境保護活動を通し、人としてのあり方や自らの生き方を考えさせ、将来的に復興を担う人材の育成を目指す。</li> </ul>
----------------------------------	-----	--

## 【題材】

わかめ学習、環境保護活動

## 【対象】

全校生徒

## 【復興教育の視点】

地域の産業であるわかめの養殖や加工販売体験、環境保護活動を通し、人としてのあり方や自らの生き方を考えさせ、将来的に復興を担う人材の育成を目指す。

## 【実践の概要】

平成14年度から総合的な学習の時間の名称を「産土（うぶすな）タイム」と称し、全校テーマ「海と生きる」のもと、1年生「海と共に」、2年生「海の恵み」、3年生「海を守る」を学年テーマとして実践している。産土とは「その人が生まれ土地」を意味しており、末崎地区が国内での養殖わかめ発祥の地であり、水産業が当地区の生活を支える主産業ということから、わかめの養殖、加工、製品化、そして販売体験や魚場の環境保護活動など、末崎町に生きる生徒が自分たちの地域を学ぶ学習活動として行っている。



## 【実践の詳細】

震災後、学校及び地域の養殖施設はすべて流されたため、本実践は継続が危ぶまれたが、地元漁協、わかめ養殖組合、地域漁家等の協力を頂き、途切れることなく継続することができた。以下各学年の実践である。



## 【1年生】

3年間の見通しをもつためのオリエンテーション。そして末崎のわかめ養殖について知る座学から始める。その後はロープ等養殖施設の整備。11月中旬に船に乗り、わかめ種苗の巻きつけ作業。天候状況や生育状況にも左右されるが、2月～3月にかけて、わかめの早採り作業。そして刈り取り作業を行う。刈り取ったわかめはすぐ湯通し・塩蔵加工作業を行い、次年度に向け漁協冷蔵庫に保存していただいている。なお、末崎町の復興を願い、刈り取り作業の前には関係者全員で集合写真を撮り、その写真を次年度販売するパッケージシールにしている。



## 【2年生】

新年度早々生徒2～3名が1グループとなり、地元の漁家でわかめから茎と葉の部分を生かす芯抜き作業体験を行う。その経験を生かし、5月下旬に1年生の時刈り取ったわかめの芯抜き作業を校内で行う。7月中旬にパッケージ詰め作業を行い、「ふれあいわかめ」として製品を完成させる。従来修学旅行先の東京都内で販売体験を行ってきたが、今年度は盛岡市（4ヶ所）に変更し、計1234パックの「ふれあいわかめ」を販売した。



## 【3年生】

いよいよ総合的な学習の時間の完結の取組である。森林管理署と「悠々の森」協定を交わし、国有林内に学校林「産土の森」を所有している。事前学習を経て、6月上旬にわかめを養殖する海にミネラルなど栄養分をたっぷり含んだ川の水が流れ込むように、森林管理署職員の指導のもと植林、下草刈り、枝切り、間伐等の作業を行う。このように海を離れるが、海を育む森林づくり体験を通して、森林と海が密接に関わっていることを学習する。また地域産業の復興にも通じることを学ぶのである。



## 【授業の展開】

わかめ販売に向けての接客指導

期日 平成24年9月14日(金)

教科 総合的な学習の時間

概要

支援団体セイブザチルドレンジャパンの支援を受けファミリーマートによる授業。ファミリーマート盛岡営業所の大日方所長より接客術や販売する側としての心構えを教えていただいた。今までは教師による指導だったが、プロからの指導を受け、わかめ販売への意欲がより高まった。



## 【生徒の感想】

## ○わかめ学習継続について

震災があってできないかと思ったが、今年もわかめを育てることができてうれしい。

先輩たちが続けてきたわかめ養殖体験を、自分たちもやりたと思っていた。無事成功してよかった。

## ○接客指導について

今日教わったことを生かして、わかめを全部売り切りたい。

## ○わかめ販売体験について

一からみんなで育てたので、販売できてよかった。

自分たちが育てたわかめを販売することができてうれしい。これまでの作業で製品化するまでにこんなに大変なんだと学習した。

## 【まとめ】

今年度で11年目の取組となるが、これまでの取組を通して、次のようなことが成果として考えられる。

◎「海と生きる」の全校テーマのもと、地元末崎の優れた素材であるわかめに焦点をあて、各学年に生態、養殖、製品化・販売、環境保全等の学習を位置付けたことにより、自然と産業の深い関わりを学ぶことができたこと。

◎生徒が住んでいる地域を理解することにより、また地域の方々と触れ合うことで地域の一員としての自覚を持ち、今後地域を復興していこうとする意識を高めることができたこと。

また、現在及び今後にかけて、次のような課題を抱えている。

- ・指導して下さる漁家の減少及び高齢化
- ・諸費用の捻出
- ・生徒数の減少による職員の負担増及び作業量の縮小
- ・天候による計画の変更

しかし、今後も可能な限り、末崎の復興を担うという意識をもたせながら継続していきたいと考えている。





<b>特別活動 総合 全学年</b>	ね ら い	内陸や他県の中学生との交流活動を通して、3・11東日本大震災津波からこれまでの有形無形の支援、応援、励ましへの感謝の気持ちと復興にかける思いをまとめ、表現し、人間としての在り方、生き方を考えて実践しようとする心情や態度を育てる。
----------------------------	-------------	--

- 【活動の視点】
- ・構成詩（呼びかけ）、合唱、演舞、郷土芸能などの表現活動を通して被災地からの発信を行う。
  - ・生徒自身が企画製作や練習を進める中で、思いを深め体現できるようにする。
  - ・交流校との心の交流を大切にし、互いの良さを学ぶ。

## 【実践の概要】

月	日	学年	内容	主な活動
4	17~19	3年	修学旅行	いわて銀河プラザで地場産品販売 合唱
7	2~4	2年	花泉中訪問 合同職場体験	交流会 構成詩発表 合同職場体験
7	25	3年	下福田中来校 交流への招待 計画	企画紹介 意見交換
7	29~31	3年	神奈川県大和市立下福田中を訪問	構成詩・運動会演舞発表
8	7	3年親子	花泉夏祭りに親子行事で参加	運動会演舞発表 合同チームで餅つき
8	27	3年	名古屋市中学生との交流	運動会演舞発表 交流ゲーム 合唱
8	29~31	2年	修学旅行	いわて銀河プラザで地場産品販売
9	27	1年	名古屋市立丸の内中との交流	交流レヒー 名古屋城案内 合唱構成詩発表
10	6	3年	花泉中3年ボランティアに来校	合唱 フォークダンス 苗募金贈呈

## 【実践の詳細】

## 2年 花泉中学校との交流・合同職場体験 7/2~7/4



花泉中の合唱に聴き入る2年生↑



心をこめ見送ってくれる花泉中生↑

2年で例年行っている職場体験を、本年度は花泉中学校のご協力をいただき一緒に参加させていただきました。

初日には両校2年生による交流会を行い、花泉中学校の学年合唱を聴かせて頂いたり、本校の活動の様子や震災について紹介したりと、和やかに交流を深めました。

花泉中学校には小友中学校のために全校に呼びかけのポスターが貼ってあり、生徒やPTAの皆さんなど、たくさんの方々が支援のために頑張ってくれていることを改めて感じる機会ともなりました。

(学校だより)

## 3年 神奈川下福田中学校との交流 7/29~7/31



100人以上を前に14人で構成詩を発表↑

3年生は震災以来支援をいただいていた教育支援団体エドベンチャーのご縁で、神奈川県大和市立下福田中3年生との交流事業を行いました。交流会では構成詩や演舞を発表し、悲しみを乗り越え、20名の絆と感謝を胸に、精一杯生きてくことを力強く発信しました。

下福田中からは、被災地の思いを強く受け止め、共に歩いていこうという決意を発表していただきました。会食やホームステイも体験させていただき、忘れられない思い出となりました。

(学校だより)

## 小友に生きる ~被災地からの発信~

小友で生きていく限り、小友で起きた震災を忘れるわけにはいきません。辛いことであっても、その思いと一緒に生きていく覚悟が、これからのわたしたちに必要なことだと思っています。わたしたちには、ふるさとをもう一度創るといふ役目があります。壊れてしまったふるさとのかわりに。それは大変な道のりだと思うけれど、自分たちの手で創るといふ喜びもあります。今、小友の町は津波がきたとは思えないくらい緑に囲まれて、空気もきれいです。この小友を守って、震災前のように見渡す限りの田んぼが広がる風景を復活させたいです。5年先でも、10年先でもいいので、窓からいっぱい広がる景色を、もう一度見たいです。そのためにも、これからも小友で仲間たちとがんばっていきましょうと思います。

(2年修学旅行 いわて銀河プラザでの資料)



## 3年 名古屋中学生訪問団との交流 8/27



名古屋の生徒と心を通わせた交流会↑



名古屋市内の中学生 20 名の交流団は 27 日から 2 日間の日程で、同市が職員派遣などの支援を続ける陸前高田市を初めて訪問している。初日は中学生との交流会や、被災施設を見学し、津波被害への理解を深めた。交流団は同市米崎中を訪問。同校と小友中の 3 年生約 40 名と互いの地元紹介やゲームを楽しんだ。(新聞記事より)

## 1年 名古屋市丸の内中学校との交流 9/27



丸の内中と記念のフラッグを交換↑



←名古屋城をバックに全員で記念撮影

東北、陸前高田は多くが被災地となりましたが、それを応援するために準備から案内、企画、プレゼントをいただきました。「復興の応援、本当にありがとうございます。」と伝えたいです。

私たちにはまだ感謝するという恩返ししかできませんが 10 年後、20 年後に名古屋の皆さんに復興した陸前高田を見てもらって、「皆さんのおかげでがんばれましたよ。」と言えるまでが恩返しだと考えています。それまでまだ時間はかかると思うけれど、みなさんの応援を糧にして、私たちががんばっていききたいと思います。(生徒感想)

## 3年 花泉中学校ボランティアとの交流 10/6



校歌の合同合唱↑



昼食を一緒に↑

花泉中学校 3 年生徒 135 名と P T A 有志・職員の方々が来校し、ボランティア活動と、本校 3 年 14 名との交流を行いました。花泉中学校とは、昨年に引き続き、入学式後に紅白餅の寄贈、募金活動によるプリンター 60 鉢の寄贈、花泉町内での合同職場体験、部活動交流、夏祭り招待など、密度の濃い交流が続いています。

今回の訪問では 1 階から 3 階までのガラス磨き、午後は体育館で花泉中 P T A おやじバンドの応援ソング、フォークダンス、合唱交流、募金の贈呈などが行われました。本校生徒も心をこめて対応し、感謝の気持ちを伝えることができました。(学校だより)

## 3年 文化祭での合唱構成詩発表 10/28



劇を通して伝えたいメッセージは「仲間・命の大切さ」でした。自分たちが経験した東日本大震災と自分たちの経験したことの無い戦争について考えました。「ヌチドタカラ〜命こそ宝〜」という劇を演じるからには「仲間・命の大切さ」を見ている人にしっかりと伝えたいと思いました。(生徒感想)

↑命の大切さを伝えた演劇「ヌチドタカラ」。自作の合唱構成詩でエンディング

小友中最後の文化祭ということでもとても感慨深いものがありました。中学の歴史や震災前の景色を見て懐かしく、哀しく、辛く、悔しく、色々な感情が湧いてきました。でも「小友は良いなあ。」と思いました。発表では、生徒の「文化祭」に対する熱い思いが良く伝わってきましたし、まじめでひたむきに努力する小友の良さが前面に出ているように思いました。これからは生徒の皆さんが主役です。どうぞ誇りをもって、小友を住み良い、世界一番せな町に作り上げていって下さい。(保護者感想)

## 【実践のまとめ】

本年度学校経営の重点となる行動指針の一つに「大震災大津波の経験を語り、その意味を考える生徒」を掲げた。また、本校は今年度をもって閉校し、米崎中・広田中と統合することになっており、1つ1つの行事には「歴史をまとめる」という特別な意味も込められていた。その中で、多くの支援者への感謝を伝え届ける活動を検討し、地域や支援先に震災からの復興への願い、決意を発信していこうと考えた。

発達段階や体験の違いによって学年ごとに重点を変えているが、「仲間を大切にし、前向きに生きる」「地域の素晴らしさを学び、伝える」「感謝の心を言葉や表情、行動に表す」などをめざした復興教育を進めることができた。全校での取り組みが個々の生徒に浸透し、地域の復興の担い手として現実を見つめ、今すべきことに全力を尽くす態度や、ボランティアリズムの醸成に繋がっていくものと期待する。



総合的な学習 の時間 全学年	ね ら い	命③ どんなにつらいことや苦しいことにも負けず、希望と夢をもち、たくましく生きていく強い意志と態度を養う。
----------------------	-------------	--

【題材】有住ブランドを「教育遺産」にしよう

【対象】全学年

【復興教育の視点】

本校では、特色ある教育活動である体力づくり活動への取り組みをとおして、全人的な生きる力の育成にあたってきました。体力づくりコンテストへの挑戦を目標に、生徒一丸となって取り組んでいる学習・全校トレーニング・フリースピーチ・挨拶礼儀・地域との関わり等の「日常のひたむきな姿」こそが「これからの復興発展を担う生徒のあるべき姿」ととらえました。生徒会活動をとおして有住中学校のよさを浮き彫りにし教育遺産という形で残すことが、本校の復興教育につながると考えました。

【実践の概要】

1. 先輩に学ぶ「活動報告会」
2. リーダーとしての挑戦「修学旅行、協同合宿」
3. 決意の表明「生徒総会」
4. 日常の取り組み（全校トレーニング&フリースピーチ）
5. 復興授業1「後方支援のまち すみた」  
復興授業2「被災地にピアノを届ける会に学ぶ」  
復興授業3「マイヤ社長から学ぶ」
6. 教育遺産宣言



ピアノ寄贈者山中氏  
ピアノでつながる支援の輪



マイヤ社長米谷氏講演  
「東日本大震災  
負けてなるものか」

【教育遺産宣言と活動の実際】

## 有住中学校教育遺産宣言

わたしたちは、先輩方からひきついできた大切なものを  
有住中学校の生徒として誇りを持ち続け、今後の活動の道しるべにするために  
有住中学校教育遺産として、ここに宣言します。

平成24年11月17日制定

### 1 全校トレーニングを毎日継続し 体力づくりに取り組みます



体力づくりの一環として、毎日放課後に「全校トレーニング」を行っています。



体力づくりの一環として、毎日放課後に「全校トレーニング」を行っています。



生徒会執行部が体力テストの結果を分析し、弱点克服のためのサーキットトレーニングを考え実行しています。

体力づくりコンテスト「毎日新聞社賞」受賞 15年連続入賞達成

### 1 先輩から後輩へ有中文化を引き継ぎ さらに発展させていきます



有住中学校生徒会には「全校トレーニング」、「合唱」、「新聞」という三つの活動の柱があります。



3年生  
学校新聞コンクールや生徒会コンテストを行い、質の向上に努めています。



8月15日と1月1日の年2回、卒業生が集まり、現況報告や後輩へのアドバイスが行われます。

OBから現役へ 有中文化の継承



1 学習・生活・部活 あらゆる活動に ひたむきに取り組めます



姿勢を正して授業する。  
積極的に手を挙げて発言する。  
その日に習ったことはその日のうちに家庭学習で復習する。  
この三項目を全校生徒を挙げて取り組んでいます。



体育館の清掃は体力づくりもかねて、ぞうきんで清掃しています。



部活動にも真剣に取り組んでいます。

いつでも どこでも 誰にでも 全員が同じ気持ちで

1 自らの力で 学校・地域社会のために 役立つ行動を実践します



文化祭前には各学年ごとに、地域の施設に文化祭のPRを行ってきます。



有住小学校の運動会には、ほとんどの生徒が用具係としてボランティアで参加しています。



4月と12月に気仙光陵支援学校の生徒の皆さんと交流しています。

地域の介護施設の訪問 有住小との連携 支援学校との交流 つながり大切に

1 チーム有住として 全員がひとつとなって活動します



住田町夏まつりへの参加 地域に 気仙のみんなへ 元気を発信

教育遺産宣言を終えての感想

- 日頃自分たちが行って来たことを地域・保護者の皆さんに発表するよい機会だったと思います。宣言したことを行動に移せるように、これから生活していきます。(1年)
- 宣言を終えて、私たちは新たにスタートすることができました。ゴールは見えたとも言えると思います。先輩が教える・伝えるという有中の方程式を伝統とし何事にも全力、そして、ひたむきに取り組んでいきたいです。(2年)
- 遺産宣言すると知ったとき、「有中がなぜ遺産になるのか？」不思議に思いませんでした。宣言文や学校紹介DVDを見たときに、やっと自分たちがやってきたことの意味が分かりました。いつも当たり前で過ごしてきた生活が、とても素晴らしいものに思えてきました。誰に対しても礼儀・挨拶ができていたり何事にもひたむきに取り組んだり、もちろん毎日の全校トレーニングで心も体も鍛えていることも、自分で言うのは変ですが素晴らしいことだと思います。形はありませんが、有中生と学校に関わっている人の誇りであり宝だと思います。宣言をして有中生全員の気持ちがさらに引き締め、ひとつになったと感じます。(3年)

保護者の声

- DVDで映し出された険しい坂道を走っている姿を初めて目の当たりにし本当に頑張っているなと強く感じました。将来子どもたちが振り返ったとき3年間の思い出になって一歩踏み出す自信につながることでしょ。
- 生徒一人一人、先生方、保護者、みんなが改めてひとつになって頑張っていると感じた宣言だったと思います。いいものはずっと残していきたいと思いました。
- 親も有中出身であり、このような場面に参加することができてうれしく思います。生徒達の呼びかけによる宣言、DVDでのひたむきに取り組む姿、聞くたびに上手になっていく合唱と感動で涙が止まりませんでした。有中生として誇りをもちどんどん頼もしくなっていく生徒達、この伝統はしっかり後輩に引き継がれていくと思います。



総合的な学習 の時間 全学年	ね ら い	社会⑯ 救援活動で働く人々の様子について調べ、人々の生命や財産を守るために働いている 人々の思いや組織的な取組について理解できるようにする。
----------------------	-------------	--

## 【復興教育の視点】

ひとづくりの視点から、住田町は後方支援として、震災直後にいち早く隣接する陸前高田市に救援活動を行ったことや既存の規則等にとらわれず住田町の森林資源を生かした仮設住宅の建設を行ったことを知り、郷土を愛する心情を育むとともに自分たちができることを提言する。

## 【活動の実際】

復興授業 よいと思うことを意欲的に「後方支援の町 住田町長に学ぶ」

学校アンケート結果  
をもとに、話し合い  
の方向をつかむ

有中生は、協力を惜しまないが「自ら進んで」という意識が欠ける。「新しいことへの挑戦」するときの心持が分からないでいる生徒が多いことを共通の課題にする。



課題 よいと思うことを自らの判断で行動するには、どんな心構えが必要なのだろうか？

カード①課題に対する今の自分の考えを書く（予想）

映像・町長の話から  
住田町の行動を知る



国や県の指示を待たずに独自の判断で仮設住宅を建てた理由やその思いを話していただく。

自らの判断で行動す  
るための心構えにつ  
いて考える

- 日々の構想（日頃の構え）
- 常に疑問をもつ
- 住田ならではのことを
- 人としてあたりまえのことを
- やるなら徹底的に

今の学校生活を振り  
返り自分たちにでき  
ることを考える



カード②課題に対する自分の考えを再度書く。(決意)

異学年グループで  
考えを交流し合う



本時で学んだことを  
発表する

人間は完全でない。適材適所で活躍すればよい。チームとして対応したい。



体力づくり日本一に向けて生徒会として、自分からアクションを起こしたい。



事後指導  
考えをまとめる

各学級で自分の考えをまとめる。  
再度、町長に自分たちのできることを提言し、意見交流する

私たちの目標「体力づくり日本一」をめざすにはそれなりの準備が大切。一人ひとりが完璧でないとできない。「住田町」がやったことを今度は「有住中」ができるようにしたい。(A子)



町長から  
有住中学校の皆さんへ  
わたしの講話を真剣に  
聞いて、即自分たちの日常に、しかも日本一へ行動する皆さんの熱気に大変感動しました。  
ありがとうございます。

(町長からA子に対して)  
全員が全て完璧にできるということは不可能に近いと思います。しかし、リーダーは行動することだと思います。「危険や犠牲を伴うあらゆる危険の中で、最も危険なことは何もしないことである。」ジョン・F・ケネディー

一人ひとりが役割をもって行動し生徒会長として、その力を最大限に引き出しまとめていくのが私の役目です。(B子)

(町長からB子に対して)  
3年生としてリーダーとして行動すると思いますが、ついてこれない下級生へは責任ではなく愛情で接してはいかがでしょうか。

有中生は普段から失敗を恐れて必ず誰かの許しをもらってから行動に移り行動が遅くなったり、切に間に合わなかったり。有中ならではの慎重さが悪いことになってしまうことが多いので、人の承認は関係なく人のためと思ったことは素早く対応したい。(C子)

(町長からC子に対して)  
多くの方から同意を得る。全員が納得してから行動する。最も理想的な形ではあるが理想形が失敗したときにどうしますか？C子さんの言う通り行動のスタンスをどこに置くかだと思います。「行動は必ずしも幸福をもたらさないかもしれないが、行動しないところに幸せは生まれません。」ベンジャミン・D



合唱活動の充実	ね ら い	・他地区との交流、学校間交流、地域との合唱交流を通して、今回の震災津波を乗り越え、郷土を愛し、岩手の復興・発展を担う人材を育成する。
---------	-------------	--

## 【題材】

- ・充実した教育活動の展開（様々な体験や活動を生かした教材開発や指導の工夫）

## 【対象】

- ・他地区との交流、学校間の交流、地域との交流

## 【復興教育の視点】

- ・各校の実情に応じた内容（復興教育を学校経営に位置付け、各校の状況や生徒のニーズを踏まえて取り組む。）

## 【実践の概要 1】＜合唱交流会＞

昨年度から、盛岡市立城西中学校特設合唱部との交流を行っているが、今年度は復興教育の視点から、改めてその内容を再構築し、実践を展開した。

平成23年8月、本校の体育館において、盛岡市立城西中学校特設合唱部約50名が来校し、本校の合唱の合唱力の向上を目的として、合唱発表交流会を行った。今年度は、本校全校生徒が盛岡市都南文化会館（キャラホール）に出向いて、城西中学校特設合唱部との交流を行った。復興教育の人材育成という観点から、今まで行われていた交流活動を、双方の視点からその教育的な価値についてとらえ直し、今後どのように継続、発展させていくかを検討することができた。



## 【実践の詳細 1】

## ＜盛岡市立城西中学校との合唱交流会＞

- ・目的 城西中学校特設合唱部から良いところを学び、これからの合唱に生かす。
- ・期日 平成24年8月7日（火）
- ・会場 盛岡市都南文化会館（キャラホール）
- ・対象 盛岡市立城西中学校特設合唱部90名  
釜石市立甲子中学校全校生徒151名
- ・内容 ①城西中学校の合唱を観覧する。  
②甲子中学校の合唱を発表する。  
③両校で合同合唱をする。

## 【生徒の感想】

- ・盛岡に行って、しかも大きなステージで歌うのは初めての経験だったので、とても緊張した。城西中学校特設合唱部の合唱は迫力があり、とても素晴らしかった。（1年男子）
- ・城西中学校特設合唱部の合唱は、素晴らしい合唱で会場全体に美しいハーモニーが響いていた。会場も今まで経験したことのないような大きな会場で、ステージに立って足が震えた。今年は「かまいたちの第九」に出場するので、貴重な経験になった。（2年女子）

## 【実践の概要2】＜地域の行事への参加＞

年末恒例の風物詩として定着した「かまいしの第九」には、「オーケストラと歌おう」というコーナーがあり、今年度は本校が出演した。心をついに“希望の歌”を歌い上げようと毎日の放課後練習に真剣に取り組み、震災からの復興を願い、高らかに復興への思いを歌い上げた。

## 【実践の詳細2】

### ＜「かまいしの第九」への参加＞

- ・目的 釜石市民やオーケストラと一緒に、震災で傷んだ故郷の再生、復興への思いを声高らかに歌う。
- ・期日 平成24年12月9日（日）
- ・会場 岩手県立釜石高校第一体育館
- ・対象 釜石市立甲子中学校、かまいし第九の会、その他県内外の愛好者
- ・内容
  - ①オーケストラと歌おう
    - ・釜石市立甲子中学校校歌
    - ・メドレー（いざたて戦人よ、若人の歌、学生歌）
  - ②モルダウ
  - ③交響曲第9番「合唱」



## 【生徒の感想】

- ・リハーサルの時に、目の前で響くオーケストラの音に衝撃を受け、とても緊張した。本番では、練習の成果を十分に発揮出来たと自分では思う。演奏に合わせて、校歌を歌えたことが中学校3年間の良い思い出になった。どんな形でもいいので、釜石や地域の復興の役に立てるような人間になりたい。（3年男子）
- ・去年は、この場所で聴衆として「かまいしの第九」を聞いた。そして、今年はオーケストラに合わせて、歌うことが出来た。来年は、私も「かまいし第九の会」のメンバーに加わって、釜石の復興が一日でも早く達成できるように第九を歌いたい。（3年女子）

## 【まとめ】

- ・本校は、震災による直接的な被害はほとんどなかったが、教室や体育館が避難所となり、通常の教育活動に戻るまで数ヶ月を要した。今回の合唱の取り組みを通して、生徒達は郷土の復興、発展には自分たちの力が必要だということを感じ、地域に勇気や希望、元気を与えられる合唱活動に取り組むことが出来たと実感している。今後も、夢や希望を大切に、心優しくたくましく生きていく生徒の育成を図っていきたい。



特設ラグビー部の活動	ね ら い	・地域との交流（ラグビー）を通して、今回の震災津波を乗り越え、郷土を愛し、岩手の復興・発展を担う人材を育成する。
------------	-------------	--

## 【題材】

- ・充実した教育活動の展開（様々な体験や活動を生かした教材開発や指導の工夫）

## 【対象】

- ・地域との交流

## 【復興教育の視点】

- ・各校の実情に応じた内容（復興教育を学校経営に位置付け、各校の状況や生徒のニーズを踏まえて取り組む。）

## 【実践の概要】

本校が位置する釜石市甲子町には、過去全日本選手権で7連覇した新日鐵釜石ラグビー部（現釜石シーウェイブス）の松倉グラウンドがあり、地域柄ラグビーの盛んな所である。本校の保護者をはじめ、地域にはラグビー選手や指導者が多数居住している。

そのような地域の特性を生かして、本校では平成8年の2学期から、部活動の一環として3年生を中心に特設ラグビー部を設置し、県大会へ参加している。今年度も、釜石シーウェイブス（釜石SW）から指導者を派遣していただき、2学期から練習に取り組み、県大会に参加した。復興教育の人材育成という観点から、地域の方々に学校運営に積極的に参画してもらうことを通して、子どもたちの教育を学校単独ではなく保護者や地域の方々と協働で進めていくことをねらいとして行われている活動である。



## 【実践の詳細】

<特設ラグビー部の活動について>

- ・参加大会 平成24年11月3日（土）～5日（月）  
平成24年度第59回岩手県中学校総合体育大会ラグビー競技  
会場 北上市総合運動公園
- ・活動日程 選手募集 8月27日（月）～9月4日（火）参加申込書〆切  
練習期間 9月20日（木）～大会まで  
練習時間 平日の放課後（17：00～19：00）  
活動場所 本校校庭
- ・指導者 新日鐵釜石OB、釜石シーウェイブス（釜石SW）からの指導者 本校教職員
- ・指導の方針
  - ① あいさつと返事が出来る子を育てる。  
これからの社会において、コミュニケーション能力が必要不可欠の能力であることから、徹底して指導に当たる。
  - ② 向上心と反省の心  
注意や助言をされたときなど、素直に聞き入れ、同じ失敗を繰り返さないように意識させる。

- ③ 積極的に取り組むこと。  
 普段の生活から勉強と部活動を両立出来るよう、自分から積極的に取り組み、一人ひとりの目標達成に向け、一層の努力を重ねさせる。
- ④ 仲間への配慮  
 仲間に対する「信頼」と「奉仕」の気持ちを持たせ、失敗をおそれずいつも自分の近くには仲間がいるという気持ちを皆が感じられるようなチームを目指す。
- ⑤ 周囲への感謝  
 普段「当たり前だと思っていること」についても、感謝の念を持ちながら謙虚な心を醸成し、学年を問わず相互に尊重しあえるチーム作りに努める。
- ⑥ 安全と怪我対策  
 基礎体力の強化と食事、休憩のバランスを考えさせ、自己管理の徹底を図る。



#### 【生徒の感想】

- ・兄が、以前ラグビーをやっていたので、僕も参加してみた。先輩は体も大きくてタックルするのが少し怖かった。指導をしてくださった釜石SWの方々は親切に教えてくれた。難しいルールも丁寧に教えてくれた。大会ではもう少しのところで勝利することが出来たが残念だった。今年学んだことを来年に生かしていきたい。（1年男子）
- ・今年もラグビーに参加することにした。部活動が終わってからの活動で大変なこともあるが、家族の応援で頑張ろうと思った。練習には、毎日釜石SWの方々が見えて熱心に指導してくださった。釜石は震災の被害に遭い、大変な時だから、少しでも地域の力になろうと思って必死で試合に臨んだ。来年は、是非とも勝ちたい。（2年男子）
- ・3年間やってきたことの全てをぶつけるつもりで相手にタックルをした。釜石SWの方々の熱意に応えようと頑張ったが、相手の方が体も大きく一枚上手だった。3年間教えてくださったことを無駄にしないように、高校へ進学したらラグビー部に入りたい。そして活躍し、少しでも釜石や地域の役に立ちたい。（3年男子）

#### 【まとめ】

本校を取り巻く地域は、大変教育熱心であり、学校に対しての協力を惜しまない。ラグビーにおいても、釜石SWの全面的な協力の下、活動に取り組んでいる。生徒は、特設ラグビー部の活動を通して、向上心や感謝、奉仕の心を養い、忍耐力や困難を乗り越える力を身につける事が出来た。これからも、地域の特性を生かし、地域の方の協力を得ながら、夢や希望を大切に、被災地への復旧・復興に貢献したいという意欲を高めていきたい。



ふるさと学習 全学年	ね ら い	郷土芸能伝承活動を中心としたふるさと学習を通して 郷土のふるさとに対する愛情を深める心を育てる。
---------------	-------------	---

## 【題材】

郷土芸能（鹿子踊り・大神楽・虎舞）伝承活動を通じてふるさとへの愛情を深める。

## 【対象】

全校生徒

## 【復興教育の視点】

- 郷土芸能伝承活動を通し、ふるさとの歴史を学ぶとともに、ふるさとの文化と伝統を引き継ぎ、地域への愛着を高める。  
また、この取り組みを通し学校と地域とのかかわりの在り方を見直すとともに、地域の教育力を再構築し、地域とともに学校教育を作り上げていく。
- 地域に対しての郷土芸能発表会を実施し、地域とのかかわりをより深いものへとしていく。

## 【実践の概要】

- 地域伝統芸能指導者との会議の実施
- 郷土芸能講演会の実施
- 地域指導者と連携した調べ学習と練習
- 郷土芸能の発表会の開催



## 【実践の詳細】

4月26日（木）

「地域伝統芸能指導者との会議 1」

9月7日（金）ガイダンス 1

- 校長が説明を行い、郷土芸能の理解を図った。

9月10日（月）「地域伝統芸能指導者との会議 2」

9月12日（水）ガイダンス 2

- 取組のねらいと見通しの説明
- 自分がやってみたい郷土芸能を鹿子踊り・大神楽・虎舞の3つから選択

10月3日（水）講義「郷土芸能の歴史について」

- 鹿踊り、大神楽、虎舞それぞれの保存会の方からの講話

10月4日（木）放課後の練習会の実施

- 平日の事業時間内に、保存会の方に来ていただくことが、難しいため、保存会に所属している代表生徒（練習リーダー）が、それぞれの踊り方を放課後に教えていただいた。習ったことを代表生徒が平日の授業で各チームへ伝えた。

10月5、9、15日 郷土芸能の練習

- 各チームの3年生数人が放課後や休日を利用し、保存会の方々にインタビューしたり資料をまとめたりして調査を行った。

10月17日（水）「郷土芸能発表会」

- 郷土芸能の調査発表
- 各郷土芸能の実演披露



## 【授業の展開】

## 「郷土芸能発表会」

## 1 ねらい

伝統文化に触れ、ふるさと吉里吉里に対する理解を深めるとともに、郷土を愛する心を育てる。

吉里吉里の伝統文化である郷土芸能に全校で取り組み、文化の担い手であるという自覚と誇りを持たせ、貴重な文化を先輩から後輩に伝える。

## 2 期日 10月17日(水) 5, 6校時

3 参加者 全校生徒(84名)  
保護者・地域の方々(230名)

## 4 内容

- (1) 調査発表
- (2) 郷土芸能発表
- (3) 感想発表
- (4) お礼の挨拶



## 【生徒の感想】

本番までに先輩たちにたくさん笛を教えてくださいました。私は郷土芸能にあまり関心をもっていなかったけれど、自分もやったり、他のものを見たりしながら、私達は文化を受け継いでいてすごい、という気持ちになりました。(1年女子)

私は郷土芸能を一回もやったことがなかったけど、虎舞をやってみて難しかったです。しかし、吉里吉里に誇りをもつことができました。あまりうまくできなかったけど、全校で郷土芸能をやるのは、すごく気持ちがよくて、うれしかったです。また、地域の人たちによるこんでもらえたので、やってよかったと思いました。(2年女子)

全校の一人ひとりが色々な郷土芸能をおどれるようになったし、お客さんの拍手の温かさを改めて知れたので、良かったです。僕も虎舞が好きでやっているけれど、初心者の人にも虎舞のすばらしさを伝えられたし、自分も楽しくできたのでよかった。お客さんがあれほど入るとは思っていなかったなので、とてもうれしかった。僕らも郷土芸能は好きだし、地域の方々もやっぱり好きなんだと思った。(3年男子)

## 【まとめ】

今回の郷土芸能伝承活動を行うことで、生徒たちは自分たちが次の時代の担い手であることを自覚できたと思う。また、保存会の方々や地域の方々との接し合いを通じて、郷土芸能に対する熱い想いを感じることができたのではないかと思う。今後、さらに調べ学習を充実させ、技術をさらに高めて、よりよいものを探求できるようにさせていきたい。

## 【地域の方々の感想】

子どもたちから、すごくパワーをいただいた。みんな喜んでいる。すごく良かった。これからは、伝統芸能を通して、子どもたちと一緒に大槌を元気にしていきたい。



ねらい	震災で用具の全てが失われた『法の脇鹿踊り』を、生徒の手で復活することを中心に据えながら、全員で郷土の文化である芸能を復活・継承することで、地域のために役立とうとする心を育てる。
-----	--

【題材】 郷土芸能の復活

【対象】 全校生徒

【復興教育の視点】

- (1) ひとづくり 郷土芸能の復活を通して「地域に役立つ人間づくりを進める。
- (2) 体験から学ぶ 郷土芸能の復活を通して鹿頭、衣装づくりの大変さを学ぶ
- (3) 組織的・有機的指導 郷土芸能の復活を通して、郷土芸能の伝承を「生徒から生徒へ」を基本にするための練習方法を工夫する。
- (4) 本校の実情に応じて 郷土芸能の復活を通して、地域の指導者と連携を取りながら、学校で行う練習の充実を図る。

【実践の概要】

平成22年度まで30年以上にわたり、『法の脇鹿踊り』『津軽石さんさ』『赤前ソーラン』『栄通り太鼓』の4つの郷土芸能を伝承してきた。およそ90%程度の生徒が希望して参加し、平日の夜や休日に地域の方から指導を受けて練習し、文化祭で発表を行ってきた。平日夜の練習では保護者が送迎し、文化祭当日は衣装の着付けを行うなど、家庭・地域との連携をもとに進めてきた。

しかし、平成23年度は、震災の影響で『法の脇鹿踊り』の衣装や道具が失われたことから、文化祭では郷土芸能の発表を見合わせざるを得なかった。

その後しばらくして、生徒の中から郷土芸能をやりたいという声が出て、広がりを見せていった。

そこで、今年度は復興教育の中心に郷土芸能の復活を位置づけ、郷土芸能復活の取り組みを通して、地域を大切に思う心・地域の一員として「中学生として今できること」を行い、地域の方々に喜んでもらうことの価値を生徒全員で共有し、「地域に役立つ人間づくりを進めた。

文化祭での発表を終えて、参観者からこれまでにないほどの大きな拍手をもらった。「涙が出るほど感動した」との声もいただいた。

【実践の詳細】

(1) 郷土芸能に取り組む上で解決する必要がある内容

ア 『法の脇鹿踊り』の衣装・鹿頭・太鼓の確保

イ 『栄通り太鼓』の太鼓・台の制作及び衣装のあり方

ウ 『津軽石さんさ踊り』の浴衣や笠について、復興にふさわしい衣装のあり方

エ 夜間の練習会場であった2か所の公民館が流されたことを受け、練習場所の確保

オ 練習法の工夫

カ 地域の指導者の方々との連携

(2) 対応策

ア 法の脇鹿踊りの衣装と鹿頭は、材料を購入して制作し、太鼓は支援を受けて購入する。

(総合的な学習の時間で製作するコースを設定する。)

イ 栄通り太鼓の台は、角材等を購入して、校内で制作し、法被の代わりにTシャツを着用することにする。

ウ 津軽石さんさ踊りの浴衣は、当面は質素にしていけることを重視しTシャツを着用することにする。

(浴衣を着用する場合、保護者の着付け講習が必要になるので、保護者の負担を軽減する。)

エ 夜間の練習場所は確保できないので、総合的な学習の時間と放課後の練習とする。

オ 地域の方が指導する形式から、上級生が下級生に指導する形式に移行する。

(地域の活動から、学校が主体の活動に変更する。)

カ 地域の指導者の方との連絡を密にし、指導可能な日に、3年生を中心に指導していただく機会を設定する。

(3) 取り組みの流れ

① 総合的な学習の時間で8コースのうち5コースで復興関係の講座を設定【6～7月】

・法の脇鹿踊り衣装コース (布を裁断・縫製をして制作)

・法の脇鹿踊り鹿頭コース (木工・塗装・接着をして制作)

・歴史コース (土器から知る歴史(津波の歴史・集落の場所))

・郷土コース (震災後の環境変化(地形・植物の変化))

・CM制作コース (郷土芸能の取り組経過の記録)

【法の脇鹿踊り衣装コース】



採寸・裁断作業



縫製作業



【法の脇鹿踊り鹿頭コース】



ベニヤ板の型どり作業



木材の切断・切削・組立作業



歯の部分の塗装作業

- ② 生徒全員が所属芸能を選択(基本的には自分の地区の芸能)【7月】
  - ・津中生全員で、地域の伝統を復活・継承していくため、今年度から全員参加
  - ・復活することの意義・地域のために役立つことの価値についての確認
- ③ 3年生を指導者とするため、3年生の先行練習【9月(放課後)】
  - ・地域の指導者に依頼し、踊りや太鼓の確認
  - ・1、2年生に教えるための組織作り・計画作り

借用した太鼓で3年生先行練習 ⇒



- ④ 総合的な学習の時間で郷土芸能の取り組みを実施【9～10月】
  - ・3年生の指導で練習を実施



鹿踊り初心者への指導



津軽石さんさ踊りの指導



制作した鹿頭を装着して

- ⑤ 文化祭で郷土芸能を発表【10月】
  - ・地域への周知・敬老会の招待



栄通り太鼓(Tシャツでの演奏)



津軽石さんさ踊り



復活した法の脇鹿踊り

【実践しての考察】

郷土芸能を、生徒の手で伝承していく形に移行したことで、生徒の意欲を高いところに引き上げることができた。また、地域の方の感動が生徒に伝わったことで、生徒の満足感も大きく、地域のために努力し喜んでもらうこと・地域のために役立つことに対する意識を大きく変えることができた。手作りの復活ではあったが、多くの支援をいただいたことに感謝する心も育てることができた。



- ・心のケア
- ・他地区・学校間の連携
- ・地域との交流

ねらい

- ・学校として組織的に、心の病気から不登校になりがちな生徒や心が不安定な生徒へのサポートを行う。
- ・部活動において他地区との連携を強化することにより、生徒に意欲的・積極的に活動を行わせる。
- ・地域に自分達の頑張る姿を発信したり、地域に貢献したりする。

### 【題材・対象】

- ・定期的な教育相談と、カウンセリング、心のケアのための講演会や音楽鑑賞会の実施
- ・積極的な部活動推進のための盛岡・滝沢地区との交流
- ・地域にある山田グランド仮設住宅に住んでいるお年寄りとの交流

### 【復興教育の視点】

学校教育目標に「郷土の復興に尽くす生徒」を位置づけ、目指す生徒像を「郷土に愛着を持ち、積極的に地域に貢献する生徒」として、日常生活や活動の中でしっかり取り組むことが、地域の復興に結びつくことを、すべての教育活動で推進していく

### 【実践の詳細】

#### 心のケア

#### 毎週木・金曜日 スクールカウンセラー（以下SC）によるカウンセリング

昨年度から継続して2年目に入るSCと今年度、東日本大震災心理支援センターの支援により大阪よりおいでいただいているSCの2名で対応。木曜日に2人で打ち合わせを行い、2年目のSCが主に継続している生徒を担当。新規の生徒と保護者のカウンセリングをもう一人のSCが担当している。週平均して10～12名のカウンセリングを行っている。

#### 定期的な教育相談 5月29～31日 11月26～28日実施

学期に一度はすべての生徒に教育相談を実施している。事前に生活アンケートを実施し、それをもとに、教育相談週間を設定。部活動をなしにして集中的に取り組んでいる。

#### 音楽鑑賞会 4月20日（金）実施

良質の音楽を鑑賞することで心のケアを図りたいと、スラヴァ・キャラバンによる音楽鑑賞会を実施した。また、校長会の支援による演劇鑑賞会わらび座「走れメロス」も6月に実施した。

#### PTA講演会 7月5日（木）実施

大坂からSCとして本校においでいただいている臨床心理士の先生に、保護者を対象とした子供と親のより良い関係を築くための講演会を実施した。



#### 保護者の声

中学生は難しい時期だからこそ、この子に関わり続ける事、「学校と家庭と地域で子供の心を抱える」事の大切さを感じました。素晴らしい講演会でした。

### 他地区・学校間の連携

昨年度から、盛岡・滝沢地区の中学校と生徒会及び部活動について連携を図り、何度か交流会を実施してきている。今年度は、新人大会の前に山田町に来ていただいて、部活動を中心に交流会を実施した。

部活動交流会 9月1日 (土) 9:00~14:00

バスケットボール; 北陵中学校、大宮中学校、厨川中学校、山田高校

バドミントン 北陵中学校、厨川中学校、  
繫中学校、大宮中学校

バレーボール 北陵中学校、大宮中学校、山田高校

卓球 土淵中学校、姥屋敷中学校

剣道 北陵中学校、大宮中学校

柔道 大宮中学校



### 地域との交流

学校の目の前に、町営グランド仮設住宅が広がっている。この仮設住宅には1人暮らしの老人の方々も多く、生徒会では交流を図るために学校行事の前には仮設住宅を回って案内を配った。案内を配った行事には多くの方々に見に来ていただいた。その行事は以下のとおりです。

5月24日 オリンピア(体育祭) 10月28日 わだつみ祭(文化祭)

次に、ボランティア委員会で、仮設住宅の人のために何かできないかと代表の方にお聞きしたら、仮設住宅の周りの除草作業を希望したので、委員会でボランティアを募り2回除草作業を実施した。



オリンピアを観戦する仮設の方々



ボランティアによる仮設周辺の除草

#### 山田中学校の皆さんへ

こんにちは。この仮設付近の草取りをしていただきありがとうございました。のび放題になっている草を何とかしなくてはと思いながらも高齢者が多い住宅なので、なかなか草取りができなくて悩んでいました。皆さん思いやりのあるお力できれいに草取りをしていただき、すがすがしくなった通路に植えられたひまわりの成長は本当に楽しみです。大変感謝しております。

あの日から3ヶ月はつらい毎日でしたが、6月にグランドの仮設住宅に入ってから、皆さんのほつらつとした姿と若々しい声に、元気をもらい1年を過ごしました、体育館やグランドから部活に励む声や音が聞こえてきて楽しくなります。色々悩むこともありますが、皆さんのご親切をいただいて久しぶりに明るい気持ちになっています。皆さんも大変な生活になっていると思いますが、若さで未来に向かってがんばってください。私達も頑張ります。

町民グランド仮設住宅区長

#### まとめ

生徒会が常に「自分達の元気な姿が町の復興につながる」「感謝する気持ちを忘れない」を合言葉に活動を行っていることが、全体にも浸透して、行事や部活動を盛り上げている。課題としては、これから教科や総合的な学習の時間にも位置付けていくことを考えていきたい。



文化祭関連活動 文化祭ステージ発表 復興祈願おもと青空市 全校生徒対象	ね ら い	・龍甲祭（文化祭）へ向けての活動・発表を通して、かかわっているすべての人々との「絆」について考える。 ・支えてくれる人々に対して感謝の気持ちを持ち、それに応えた活動をつくることのできるようにする。
--	-------------	---

【題材】「絆」『新生！小本中』からの発信 ～龍甲祭にかかわる活動を通して～

龍甲祭ステージ発表に向けての活動

【対象】小本中全校生徒 51名 （1学年 19名 2学年 16名 3学年 16名）

【現在の小本中】

平成23年4月15日、震災後の小本中学校は町内岩泉中学校の3階を間借りした仮校舎でのスタートであった。1学期、慣れない遠距離バス通学、内陸の岩泉の暑さもあり、だんだんに疲れが蓄積していく様子が見えた。そんな中で、生徒たちが初めて元気を取り戻したのは、9月まで延期されていた体育祭へ向けての活動であった。生徒会の企画を中心に進められ、全校の生徒から「いよいよ僕たちの出番だ！」という意気込みが感じられた。「自分達の企画で、活動すること」を心から楽しんでいると感じた。その後、文化祭へ向けての活動、町内のステージ発表会など、「自ら考え、行動する」を繰り返すことにより、目に見えて元気を取り戻していった。3学期になり、現在の小本地区・大牛内の応急仮設校舎に移り、ようやく自分たちの校舎で生活を始めることができた。この1年間、地域や国内外を含め、多くの人々からいろいろな励ましや支援をいただき、交流を持ちながら学校生活を送ってきた。そんな中で生徒たちは、「自分たちが、ふだんの学校生活のひとつひとつを懸命になって活動すること」によって、「地域の方々や支援をいただいたみなさんが心から喜んでくれる」「自分たちの行動が他の人を勇気づける」という経験を繰り返し、「人々との絆」を感じることができた。

平成24年度、生徒たちはこれまでかかわった、また、これからかかわるすべての人たちとの「絆」を感じながら、その想いに応え「今度はわたしたち小本中から発信を」という気持ちを持って活動をスタートした。

【取組の概要】

今年の龍甲祭の内容について、生徒会執行部の話し合いで①新しい合唱曲を歌うこと②去年できなかった七頭舞のステージ発表を復活させること③学年演劇を発表すること④復興祈願おもと青空市に出演し、地域の方々に参加を呼びかけること⑤仮設住宅を訪問し、龍甲祭に地域の方の意見を取り入れることの5点が決定した。これらの活動を組織するため、私たち教員は、それぞれの事業を分担し、総合的な学習の時間、学級活動、放課後の時間を組み合わせ、部活動の時間も組み入れながら中期スパンの計画を立案し、龍甲祭に向けての組織的な取組を行った。

【復興教育の視点】「絆」

- ・地域  
地域に住む方々と交流し、ともに地域で生活していることや、自分たちの学校生活が地域や社会とかかわりながら成り立っていることに気づくこと。さらに、地域の一員として積極的にかかわろうとする気持ちを育てる。
- ・郷土  
郷土の伝統行事や芸能に触れ、それらを演ずることを通して、郷土の文化に誇りを持たせる。あわせて、自分たちが将来にわたってどのように向き合っていくかを考える機会とする。
- ・感謝  
自分たちの学校生活が、多くの人々の支えにより成り立っていることに気づき、支えてくれている人々の心情や行動に対して感謝の気持ちを持つこと。また、それに応え行動することができるようにする。
- ・共感・支え合い  
被災した人々とふれあう機会を持ち、その気持ちや意見として聴いたことをもとに活動する。それらを通して、思いやりの気持ちを持ち、共に支え合い生きようとする気持ちを醸成する。





不來方高校音楽部は、2011年4月、被災間もない岩泉町の避難所を訪問して小本の人々に合唱を聴かせていただいたからの縁である。今年度、オリジナルの合唱曲への挑戦に際し、不來方高校音楽部、盛岡第一高校音楽部、ともに交流のお願いを快く引き受けていただいた。決して簡単ではない合唱曲を、小本中学生のために練習し、想いを込めて交流会に臨んでいただいた。高校生たちの想いは小本中学生に伝わり、真剣な練習が始まった。そして、龍甲祭ステージでの合唱曲披露に至ることができた。この曲はこれからの小本中学生達に歌い継がれていくものとなった。

#### 生徒の感想から

- ・全校合唱では、生徒一人一人が考えた歌詞を歌にした「絆」とアカペラにアレンジした「校歌」を歌いました。「絆」は盛岡一高のみなさんに教えていただきました。すごく難しい曲でしたが丁寧に教えていただき、覚えることができました。
- ・「校歌」は不來方高校のみなさんに教えていただき、短い時間でしたが交流することができました。盛岡一高・不來方高との交流では、みんなやさしくて、とてもうれしい気持ちになりました。
- ・龍甲祭で「絆」を歌うとき、緊張しましたが間奏から自分の想いを出し切ることができ、とてもいい合唱になりました。
- ・合唱では、練習の時からみんなやる気で楽しみながらも一生懸命頑張っていたと思います。緊張しましたが、発表の後「泣きそうになりました」と言ってくれた方がいて、練習してきた甲斐があった。とてもうれしかったです。

#### ②去年できなかつた七頭舞のステージ発表を復活させること

被災により、去年できなかつた「中野七頭舞」のステージ発表を復活させる活動。復興を願い未来を担う地域の一員として、中学生有志が伝統芸能として継承されてきた七頭舞を踊り、保護者や地域の方々へ披露する。

#### 〔活動〕

- ・有志による七頭舞同好会の募集の呼びかけ・結成（7月）
- ・中野七頭舞練習会、校内の活動をすべて終了後、地域の七頭舞保存会の方を講師に招き、指導をいただいた。（9/20.9/26.10/3.10/10/17.10/24の6回開催）
- ・当日は、鐘すりの演奏・衣装・道具についても手配していただき発表することができた。



七頭舞同好会の練習風景



龍甲祭のステージ発表後全員で

七頭舞保存会の阿部一雄さんは、生徒達が小学生の頃から指導して下さっている。本番で使う保存会の道具も中学生に貸し出して下さり、舞一つ一つに込められた意味や気持ちを何度も生徒に話し精力的に指導して下さいました。

#### 生徒の感想から

- ・文化祭では精一杯踊りきることができた。地域の人たちを喜ばせることができて良かった。
- ・昨年ではできなかつた七頭舞を今年の文化祭でできて本当に良かった。
- ・一雄さんに教えてもらえて良かった。いつも遅い時間にきてくれて感謝したい。

中学生だけで演じる七頭舞を見て、保存会の方々も地域の方々も非常にうれしそうであった。七頭舞は小本の伝統であり、今後も引き継がれていくものである。七頭舞を演じた生徒たちは、汗をいっぱいかき、達成感と充実感に溢れた表情で踊りを終え、非常に素晴らしい発表となった。中野七頭舞保存会の阿部一雄さんはじめ、多くの方の協力のおかげである。来年度、小本中学校として岩手県中学校総合文化祭に向けて取組をはじめるときっかけとしても良いスタートを切ることができた。



### ③学年演劇を発表すること

- ・昨年まで、全校演劇として発表していたが、今年度は代議員会での強い希望により「学年演劇」として上演を行うこととなった。
- ・各学年では、テーマ「絆」のもと、演劇を創り上げるための組織をたちあげ、実行委員を中心に取組が始まった。
- ・盛岡市の演劇集団の協力により、演劇ワークショップ(9/13,10/4,10/17,10/24の4回)を開催した。生徒達とじっくり話し合いながらのシナリオづくりや、演技指導をしていただいた。生徒達は苦勞しながらも、各学年で特色ある「劇」を創り上げ、上演するに至った。



はじめての演劇に期待いっぱいの1年生



2年生のみなさん、男女逆転ってどういうこと？説明してよ？



3年生は、はじめに出来ているシーンから演じてみてよ！



何をやってるかさっぱりわからなかったなあ  
それで、君たちはこの劇でいったい何を伝えたいの？

### 生徒の感想から

- ・龍甲祭では、演劇のシナリオが今までになく出来あがらなかった。不安になることもありましたが、演劇はそうやって高めていくものだと思うので結果的には良かったと思います。当日は、アドリブを入れたりして、楽しんで演じられた。私たちの劇が良かったという声をいただき、観客のみなさんに私たちの考える「友情」を伝えることができたと思います。
- ・ワークショップの時何度も内容が変わり、台本を何度も作り直して、みんなも苦しむ面があったのですが、こうして成功できたことで、私たちにとってすごく良い経験になったと思います。
- ・文化祭の前日にできあがったシーンもあり、朝早く来ての練習は大変だったけれど、学級全員で協力してつくり上げることができて良かったです。
- ・演劇は学年でも全校でも良いので続けて欲しいです。成功・失敗の他につくり上げるまでが楽しく、やりがいがあるからです。

6月の職員会議、文化祭企画の時点では龍甲祭のステージ発表は昨年と同様に全校演劇一本という確認であった。生徒会担当の意見もあり、生徒たちがステージでどのような発表を考えているのかを話し合わせた上、今年度は学年演劇の上演を行うことが決まった。私たちの予想通り、苦戦しながら取り組む生徒達の姿も見受けられたが、子どもたちは、その苦勞をも楽しみに変えながら発表に至ることができた。



## ④復興祈願おもと青空市に出演し、地域の方々に参加をよびかけること

- ・さんさ踊り練習 10月（文化祭活動として地域の方を講師に招き、2回実施）
- ・復興おもと青空市に出演・龍甲祭開催の呼びかけ（10月14日）
- ・総合的な学習の時間の活動の一環としてイベントへ参加

小本地区を代表するイベント「鮭祭り」は震災後、「復興祈願おもと青空市」として再スタートした。例年本校生徒会では、小本さんさ踊りで出演しており、文化祭前ということもありPRもかねて、踊りと共にチラシを配ったり、呼びかけを行ったりしていた。今年度は同じ日に部活動の大会等も重なることがなかったので、初めて全校生徒で参加することができた。さんさ踊りの後に急速、秋田県の花輪ばやしの皆さんから一緒に踊ってほしいと頼まれた。突然のことであったが、子どもたちは笑顔で初めての踊りを初めて出会う人たちと共に大勢の前で踊っていた。人から頼まれた時に快く引き受ける気持ちの大きさや地域の方々の前で楽しそうに振る舞える頼もしさを見ることができた。

今年度の3学年の総合的な学習では「地域のためにできる活動をしたい」、「昨年度は諸外国からも支援を受けたので今度は私たちが世界の子どものために何かをしたい」、「震災のことをもっと調べて後世に伝えたい」など能動的な活動をテーマにしたグループが生まれた。そのうちの地域のために貢献したいという生徒たちはおもと青空市でやきそばの屋台を出店する活動を行った。地域のイベントに参加すること自体が地域に貢献することであるという活動の意義を持ち、出店で得た売り上げは仮設住宅のみなさんへの贈り物にしたいという具体的な目標もあった。目標金額を決めて、自分たちで地元の商店から材料を仕入れてイベント会場で炭火で調理した。当日は保護者の皆さんに調理を手伝っていただいたこともあり予定を大幅に上回る売り上げであった。売上金はその後のグループの話し合いで仮設住宅へのクリスマスツリーのプレゼントに使うことに決まった。どんなツリーなら喜ばれるかを相談している様子から子どもたちの充実感が伝わってきた。



地域のみなさんに向けて文化祭のPR



秋田の花輪ばやしのみなさんとともに踊る

## 生徒の感想から

- ・当日急にステージ上で踊ることになり緊張しましたが、練習より振りを大きくして動くことができました。
- ・秋田の花輪ばやしの踊りを一緒に踊らせていただきました。意外に面白かったです。さんさ踊りでも声を出せました。
- ・さんさ踊りはみんなで動きをそろえてできました。たくさんのみなさんに楽しんでいただけて良かったです。
- ・今年のさんさ踊りは浴衣や帯など衣装を着けて踊ることができました。龍甲祭の案内も、地域のみなさんにしっかりアピール出来、良かったと思います。
- ・さんさは楽しく踊れました。やきそば店の出店は意外に大変な事が多く、疲れたのですがたくさん売れて良かったです。
- ・思ったよりお客さんがたくさん来て、出店メンバーだけでは手が足りなくて、いろいろな人たちに手伝っていただきました。成功して良かったです。
- ・追加して材料を買ってこなければならぬ程やきそばが売れました。嬉しかったです。協力してくれたすべての人に感謝します。売上げは、仮設住宅のみなさんへのクリスマスプレゼントのために、生徒会に寄付します。
- ・朝 7:30 に会場に行き、出店の準備をしました。中野七頭舞の出番と重なってしまい、やきそばが売れていくようすを見ることが出来なかったのが残念でした。



## ⑤仮設住宅を訪問し、龍甲祭に地域の方の意見を取り入れたこと

9月5日、生徒会執行部と3学年の総合的な学習で津波の歴史について調べている生徒が小本地区の仮設住宅で開かれる茶話会「水曜サロン」を訪問した。サロンでは仮設で生活する高齢者やボランティアの方々と一緒にゲームをしたり、世間話をしたりしながら親睦を深めた。津波の歴史について調べている生徒は昭和の津波についての話をわずかではあったが聞くことができた。

生徒会執行部員は龍甲祭の内容について地域の方々の要望を聞く目的もありサロンに参加した。今年度も夏休み中に開催された岩泉町中学生議会において、小本中学校の生徒会から「地域の方々の要望を取り入れた復興イベントの開催」を町に要望した。その後の執行部会では龍甲祭も地域のイベントであるという位置づけとして考え、龍甲祭の内容も地域の方々の声を取り入れようとなったのである。地域の方々からは「七頭舞は見たい」「だるま踊りもやったらいい」という地域の伝統芸能に対する要望が一番に出された。それに続いて、「かつては文化祭でやっていたバザーに多くの人が集まっていた」という声を聞いた。バザーは生徒にとって体験したことがない活動なので意外だったようである。バザーについてはその後の執行部会で目的を検討したりかつての取り組み方について学習した上で代議員会へ提案し、福祉的な目的でバザーを行うことを決定した。売り上げは仮設住宅にクリスマスプレゼントを贈るということにし、品物は生徒が各家庭から値段を付けて持ち寄った。生徒会執行部だけでなく、各学年からバザー実行委員を募って行ったこの取組は多くの品物が寄せられ、売り上げも先に行われた青空市での出店と同じくらいあった。クリスマスプレゼントの内容についても活動の主体となった3学年の生徒が12月の代議員会に提案し、みんなで決めるという形式を大切にすることで、小本中学校の生徒がみんなで取り組んでいるという意識が学年を越えて生まれている。また、クリスマスプレゼントの渡し方についても有志を募り自分たちで足を運んでクリスマスイブに渡そうということが提案された。

## 保護者・地域の方の感想

合唱はどの学年も上手でしたが、やはり、全体合唱がすばらしかったです。校歌がアレンジされてまた違った歌になり、さらに生徒みんなで作詞した「絆」は難しいのにそれぞれのパートともまとまりがあってすばらしかったです。演劇は今年から学年毎の発表になりましたが、短い期間でよく覚えられたと感心しました。



閉会行事の生徒会長あいさつ

来場者のみなさんをお見送り

## 生徒会前期総括より

平成24年、私たち小本中生は「飛翔」というスローガンのもと、全校一丸となって活動してきました。行事では、今まで行っていないものに挑戦したり、震災により去年できなかったことに取り組んできました。龍甲祭では、2曲の全校合唱曲「絆～かけがえのないあなたに～」・「小本中校歌（無伴奏三部合唱）」を、地域の方に初めて披露することができました。また、去年は発表できなかった「中野七頭舞」を復活したり、バザーを開催して地域の方に喜んでいただくことができました。バザーの売り上げ金を使って、仮設住宅のみなさんにクリスマスプレゼントを届けます。

## 【実践のまとめ】

平成24年度の文化祭へ向けての活動を中心に実践の一部を紹介してきた。生徒達が実際行った活動は、いつもの文化祭の取組をふだん通り、ひとつひとつ懸命に行うことであった。しかし、生徒たちは「意図を持って活動に臨むようになってきた」ということを強く感じる。今回の龍甲祭に向けた活動も、地域の方をはじめ、多くの方から助けていただいた上で活動が成り立つものが多かったように思う。しかし、「助けていただくこと」によって「社会や人々との絆」を感じることは、これから社会の一員として成長していく生徒たちにとって貴重な経験となったと考える。



教育活動全体  
対象：全学年

ねらい

様々な体験や学習を通して、震災・津波を乗り越え、郷土の未来を創造する力を身につける。

【実践の概要】

未来を創造する力を身につけるために

～『人づくり』『体験から学ぶ』『既存教育活動のフィルタリング・相互関連』～

【Change&Challenge タイム】(年6回)

・補充学習の実施「確かな学力」をつける

【教科:国語】震災を体験しての作文(5・6月)

◆東日本大震災記録集  
「心をつなげて」を作成

教育活動全体で  
取り組み

【体育祭】(5/12)

・地域に元気と感動を発信、仮設住宅に案内

【避難訓練】(6/22)

・地震への訓練等

【各教科】

・教材の工夫等

【朝読書】それぞれの震災体験を学ぶ(8/22～)



【キャリア教育・学年行事】ふるさと交流会(4/18)

特産品販売(7/4)、職場体験(9/26～27)、酪農体験(10/2)

村や関係団体等の復興取り組みへの参加



- ◆村防災訓練(9/30)
- ◆たのはた映画キャンプ=村の魅力を再発見(8/25・26)
- ◆復興道路「尾肝要トンネル」現場見学(9/30)
- ◆田野畑村復興祈念祭(10/13・14)
- ◆田野畑村教育の日(11/3)

【生徒会活動】

- ◆花いっぱい運動(7/28)
- ◆不來方高校ふれあいコンサート(10/6)
- ◆葛巻町の中学校と生徒会交流(10/10)
- ◆村復興祈念祭「夢灯りづくり」(10/13)
- ◆復興子ども会議：復興庁事業(11/3)

◆「復興太鼓」作曲(9/10～11)  
プロ和太鼓奏者・Ajo氏の指導



【道徳】生命の尊重、人権尊重の精神の育成・ボランティア精神、優しさや思いやりの心の育成(9/4)

【防災教育】地震・津波などに直面したとき、自他の命を守るための知識・技能を学ぶ(9/30 村防災訓練)

【総合的な学習】◆「田野畑村の未来を語る会 in 田野畑中学校」(9/13:早稲田大学の協力)

- ◆「太陽光発電の学習」(10/9)
- ◆「葛巻町の産業や新エネルギーに学ぶ」(10/10)
- ◆「田野畑の未来を語る32人から新しい村づくりを学ぶ」(10/15)



【文化祭】：復興教育の集大成の場として位置づけ(10/28)

★演劇発表「郷土の復興」

★レポート発表「震災に学ぶ・田野畑の未来を考える」

★一揆太鼓・復興太鼓の発表



【主な実践内容】



▲「花いっぱい運動」県外の中学校から贈られた1200本を花の苗を地域に植える！



▲震災記録集「心をつなげて」の作成朝読書でそれぞれの震災体験を学ぶ！



▲「田野畑村の未来を語る会」早稲田大学の学生と意見交換をする！



▲「村総合防災訓練」へ主体的に参加し小学生を避難誘導する中学生！



▲「不來方高校 ふれあいコンサート」仮設住宅の人達を交え楽しい時間を過ごす！



▲「江刈・葛巻・小屋瀬中学校との生徒会交流」4校が合唱を通して絆を深める！



▲新曲「復興太鼓 ～希繫(キズナ)～」の演奏は多くの村民に勇気と元気を与える！



▲戦後の復興への思いに震災からの復興への気持ちを重ねて演じた文化祭演劇！



▲将来の村を担っていく小・中学生が考えを語る「復興子ども会議」、村の将来像を発表！

【生徒の感想】

▼「これまでの復興学習を通し、復興のために自分たちができることが多くあることに気付いた。これから復興し、さらに発展していく田野畑村であってほしい。そんな中でも震災のことを忘れずに後世に伝えていきたい。」(復興子ども会議から) ▼早稲田大学生との話し合いを通し、新たに思ったこと、発見したことがあり、村の未来について考えや思いをもつことができた。」(田野畑村の未来を語る会から) ▼「葛巻中、江刈中、小屋瀬中と生徒会交流を持った。各校が合唱や学校紹介を行い、交流を持ち、感謝の気持ちを伝えることができた。その後、葛巻町の産業、新エネルギー等を学び、村の復興や将来について考える良い機会となった。」(葛巻町との生徒会交流から) ▼「自分が大人になったら、子どもに震災があったあの時のことを話してあげて”自分の命は自分で守らなければならない”ということを教えてあげたい。」(震災記録集「心をつなげて」から) ▼プロ和太鼓奏者A J O さんを招き、新曲「復興太鼓」に取り組んだ。復興祭や文化祭等で披露することで村に勇気や元気を与えることができた。(復興太鼓取り組みから)

【まとめ】

復興元年の今年、10年後、20年後のより良い郷土を目指し、未来を創造する力を身につけるために『復興教育』に取り組んだ。様々な体験や学習を通して、復興のために自分たちができることが多くあることに気付くとともに、未来の郷土の復興に貢献したいという強い気持ちが強く芽生えた。取り組みにあたっては、『人づくり』『体験から学ぶ』『既存教育活動のフィルタリング・相互関連』という視点を定め、教育活動全体での取り組みとした。そして、その集大成を発表する場を文化祭とした。過酷な現実を否応なく背負わされた生徒たちであるが、復興教育を通してたくさんの方々の優しさに触れ、全校が心をつなげてまとめ、力強く前を向いて歩み続けている。復興教育を実施したこの一年、生徒たちの大きく成長する姿を随所で見ることができた。



総合 全学年	ね ら い 絆⑨共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちを持って、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる。
<p>【題材】震災・復興における体験学習</p> <p>【対象】全学年</p> <p>【復興教育の視点】</p> <p>復興における自分の役割を学び、体験学習を通して自分自身を見つめ、これからの生き方を考える。</p> <p>【実践の概要】</p> <p>全学年において津波学習教室を実施。1学年で津波避難訓練、2学年で事業所訪問・体験学習、3学年で被災地訪問を実施した。</p> <p>【実践の詳細】</p> <p><b>■全学年 津波学習教室</b></p> <p>6 / 1、県北広域振興局土木課の方に来校していただき、津波学習教室を開催した。</p> <p>〔生徒の感想〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小さな地震でも、大きな津波になる場合があることをはじめて知った。小さな地震でも避難しなければならないことが分かった。</li> <li>・避難する場所をもう一度確認したい。家族で避難先を確認しておきたいと思った。</li> <li>・普段から準備をして自分の命を守りたい。</li> <li>・たくさんの方から支援してもらったが、物の支援だけでなく、これからこのような被害に遭わないように久慈を守る支援をしてもらっていることも分かった。お返しをしたいとも思うし、自分たちで久慈を守っていかなければならないとも思った。</li> </ul> <p><b>■第1学年 防災訓練・津波避難訓練</b></p> <p>4 / 28、全校で防災訓練に取り組んだ。2、3学年は校舎3階への避難訓練を行った。また、昨年度より1学年は、学校から高台である萩ヶ丘団地への津波避難訓練を行っている。</p> <p><b>■第2学年 事業所訪問、体験学習</b></p> <p>7 / 10、11に事業所訪問、職場体験学習を行った。感想をまとめ、学級で発表会を行った。</p> <p>〔生徒の感想〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・働くことの厳しさはあったが、人の役に立つことがとても楽しく感じた。</li> <li>・「今はしっかり勉強をしておきなさい。」「自分で考えて行動できる人になって欲しい。」「岩手を元気にしていこう。」など、お世話になった方にお話を頂いた。</li> <li>・被災地の方がえがおになれるために、小さなことでもやれることをやりたい。</li> <li>・自分たちが復興の中心として頑張っていかなければならないと思う。</li> </ul>	
	
	
	
	
	

### ■第3学年 被災地訪問・テーマ学習

10/2に田野畑村に訪問し、地域ガイドの方から震災の様子やその後の復興の様子を説明していただいた。また、学年の代表が、学習した内容や感想、復興に関するテーマ学習の成果を文化祭でステージ発表した。

〔第3学年総合的な学習の時間〕

ア.ねらい

- ・被災地に行き、被災地のようすや実際に被災された方へのインタビューを通して現実を知り、生徒たちを感じ取らせる。
- ・地域の未来に向けて自分たちの力を発信することによって、表現力・思考力をつけさせる。

イ. 取り組みの内容

- ・被災された方へのインタビュー
- ・未来の久慈市の構想 ・防災マップの作成
- ・防災の町久慈市 ・復興における自分の役割などを、グループでレポート作成、文化祭で発表。

ウ. 学習計画 (全13時間)

- ・9月上旬・・・オリエンテーション(1時間)
- ・9月中旬～・・・事前学習(2時間)
- ・9月下旬・・・被災地訪問・インタビュー  
〔田野畑村〕(4時間)
- ・10月～・・・まとめ、レポート作成(5時間)
- ・10月27日(土)・・・文化祭で発表(1時間)

〔生徒の感想〕

- ・災害に対して様々な備えをしておくことが大事だと思った。
- ・一人一人が防災知識を高める必要があると思った。
- ・日本のために尽くして、復興に協力したいと思った。
- ・被災者は苦しくても一生懸命生きている。だからこそ、自分も一生懸命生きようと感じた。
- ・『大変だな』と他人事ではなく、『自分も何ができるか考えてみよう』と思えるようになった。
- ・これからも日本で、世界で助け合っていくべきだと思った。
- ・生きていることに感謝し、命を大切にしたいという気持ちが前より強くなった。

【まとめ】

総合的な学習の時間を活用して、各学年とも特色ある取り組みができたと感じる。特に3学年のレポート作成の題材は『地震が起きたら必ずした方がよいこと』『原子力発電のない生活』『被災時の国内外からの支援』『人々の心の変化』『家族の大切さ』など多様で、地震や津波の被害を真摯に受け止め、復興に尽力する一員として、様々な角度から学ぶ機会となった。

これらの学習が、普段生徒会活動で行っているボランティア活動や行事への取り組み姿勢に影響を与え、より活発に行われるようになった。





学校の特色を  
生かした取組

ね  
らい

## 長中ソーランで地域復興

【題材】 長中ソーラン披露、キャリアプラン（職場体験学習）、震災学習列車

【対象】 全学年

【復興教育の視点】

- 3年生を中心とした長中ソーラン隊がイベント等に参加し、自分達の文化を発信することにより、地域に貢献できる人材の育成を図る。
- 既存の行事に復興の意味を加味し、地域の復興に主体的に関わる人材の育成を図る。

【実践の概要】

- 全学年 講話（復興教育の意義）を聞き、アンケート記入によって意欲を持たせる。  
フォトプロジェクトに参加し、記録と展示によって自分達の歩みを確かめる。
- 1 学年 震災学習列車の利用により、地域の実態を知る。
- 2 学年 キャリアプラン（職場体験学習）を行い、市内企業の実態に触れる。
- 3 学年 各種イベントにて長中ソーランを披露し、地域に文化を発信する。

【実践の詳細】

- 1 長中ソーラン隊が、久慈秋祭りパレードをはじめとした市内イベントだけでなく、野田まつりにも参加し、8つのイベントで自分達にできる復興に誇りを持って取り組んだ。

保護者はもちろんのこと、地域の方々にも温かく迎えられており、その期待に応えるべく、年間を通じて練習している。とくに、今年度は東京の中学校を訪問、交流することにより、新たな息吹をいただいた。



- 2 市内、35の企業にてキャリアプラン（職場体験学習）を行い、復興に向けて働く市民の姿に触れることができた。

キャリア教育の一環として例年行われている行事であり、復興についてのインタビューは実施できなかったものの、地元の企業を知り、働くことの意義について考えることができた。



- 3 震災学習列車に搭乗し、三鉄の語り部によって、改めて震災の恐ろしさと復興に向けた人々の努力に触れることができた。



4 ニコンフォトプロジェクトに参加し、活動の記録を行い、写真集を作成している。文化祭では特設ブースを体育館に設置し、保護者や地域の方に見ていただくことができた。

写真集が3月に完成する予定なので、交流した東京の中学校や講演授業をしてくれたドイツのマインツ大学齋藤教授等へ送り、感謝の気持ちを表す予定である。



5 SAVE いわたの紹介により、ドイツのマインツ大学齋藤教授が来校し、世界最先端の科学について講演授業をしていただいた。宇宙の成り立ちについて積極的な質問が出るなど、生徒たちは大きな興味を持って聞いていた。さらに岩手に ILC が設置されれば、この地に一大学術都市となることを聞き、夢をふくらませていた。教授は1月にも来日、来校予定である。



#### 【これまでの主な活動の記録】

期日	概要	内容
4月16日	修学旅行	東京の中学校とのソーラン交流
5月8日	全校朝会	復興教育についての意義付け、意識調査
5月23日	フォトプロジェクト	ニコンフォトプロジェクトへの参加
5月30日	講演授業	マインツ大学教授齋藤武彦先生来校
6月13日	避難経路の確認	マニュアル配布と避難場所確認
6月15日	津波避難訓練	市の訓練への参加
6月26日	職員配備の確認	警報発令時の配備指令連絡系統図
7月1日	ソーラン披露	修倫会
7月2日	ソーラン披露	アンバーホール二人会
7月29日	ソーラン披露	さかなまつり
7月31日	キャリアプラン	2年職場体験学習
8月5日	ソーラン披露	かわまつり
8月27日	ソーラン披露	野田まつり
9月22日	ソーラン披露	久慈秋祭りパレード
9月26日	こころのサポート	こころのサポート授業・アンケート
10月6日	ソーラン披露	長内健康を祝う会
10月28日	文化祭	フォトプロジェクト作品の展示
11月25日	ソーラン披露	上長内地区
12月5日	震災学習列車	1年生 田野畑



総合的な学習 の時間 1学年	テ ー マ	<b>宿戸の漁業復興の一躍を担おう！</b> <b>～ウニとり・塩ウニ作り～</b>
----------------------	-------------	---

【題材】 漁業体験(ウニとり・塩ウニ作り体験)

【ねらい】

- (1) 浜の仕事を体験することで、働くことの楽しさ、厳しさを学ぶ。
- (2) 色々な方々との付き合いを通して、人間関係の大切さを理解し、コミュニケーション能力を高める。
- (3) チームを組んで、互いに支えあいながら仕事をする事の大事さを学ぶ。
- (4) 新しい環境や人間関係に適応する経験をする。
- (5) 宿戸の海や漁業活動の素晴らしさを理解し、地元を大切に作る心身を育て、復興の一助を担う。

【期 日】 平成24年 8月 1日(水)～ 3日(金) 3日間 (雨天決行)

【実施場所】 宿戸漁港地先等(漁協荷さばき施設、増殖溝、岩盤漁場)

【実施内容】 増殖溝ウニ採取、ウニ剥き身作業、塩ウニ作り

【協力機関】 久慈地方振興局水産部、種市南漁業協同組合(研究部・婦人部)、  
岩手県立種市高等学校海洋開発科

【対 象】 第1学年 (男子12名、女子 9名、合計21名)

【日 程】

【1日目】 8月 1日(水)			
時刻	活動内容	場所	留意点
8:30	中学校玄関前集合・整列移動	昇降口	・ぬれてもよい靴(サンダルは不可)、軍手、タオル(持っている人)を持参する。
8:50	開会行事	宿戸漁港地先	
9:00	増殖溝ウニ採捕、磯観察	漁港隣接増殖溝	・指示に従って班毎に採取する
12:00	終了(あいさつ)、現地出発		
12:20	学校到着、解散・下校	宿戸中学校	・学校到着後着替えをしてから下校
【2日目】 8月 2日(木)			
8:30	中学校玄関前集合・整列移動	昇降口	・毎に整列
8:50	開会行事	種市南漁協 荷さばき施設	・白衣を着用し、準備する
9:00	ウニのむき身作業		・指示に従って班毎に採取する
12:00	終了(あいさつ)、現地出発		
12:20	学校到着、解散・下校	宿戸中学校	・学校到着後着替えをしてから下校
【3日目】 8月 3日(金)			
8:30	玄関前集合・整列、移動	宿戸中学校	・班毎に整列
8:50	開会行事	種市南漁協 荷さばき施設	・白衣を着用し、準備する
9:00	塩ウニ瓶詰め作業		・班毎に分かれて作業する(4班)
12:00	終了(あいさつ)、現地出発		
12:20	学校到着、清掃、帰りのHR		

【事前事後の指導】

- (1) 事前にウニや、漁業や、宿戸の海、職業などについて調べて漁業体験に臨む。
  - ① ウニについて(種類、生態など)と南部潜りについて
  - ② ウニの加工、消費、流通、調理法など
  - ③ 宿戸の漁業について、宿戸の海に係わる職業について
  - ④ 職業に就くまでに身につけたいことなど
    - ⑤ コミュニケーションの重要性(働く上で)
    - ⑥ DVDでの事前学習
- (2) 事後の活動
  - ① 自己評価後、感想文書き、ポスターや新聞にするなど学んだ事をまとめる。
  - ② 文化祭での発表と塩ウニの販売
  - ③ 修学旅行での塩ウニの販売(H25年度修学旅行)





総合的な学習 の時間 2学年	テ ー マ	<b>宿戸の漁業復興の一翼を担おう！ ～鮭とば・新巻鮭作り～</b>
----------------------	-------------	--

【題材】 漁業体験(鮭とば・新巻鮭作り体験)

【ねらい】

- (1) 体験活動の取り組みを通して、勤労の意義や働く人の思いを理解する。
- (2) 漁業関係者との関わりを通して、人間関係の大切さを理解し、コミュニケーション能力を高める。
- (3) 漁業体験や人との関わりから、生き方や進路に関する情報・収集し、活用する能力の育成を図る。
- (4) 地域の主産業の体験を通して、郷土に対する理解を深め、復興・発展に努めようとする態度を育成する。

【期 日】 平成24年12月 3日(月) 13時15分から16時

【実施場所】 種市南漁業協同組合荷さばき施設

【実施内容】 鮭とば作り、新巻鮭作り

【協力機関】 種市南漁業協同組合(研究部・婦人部)

【対 象】 第2学年 (男子12名、女子17名、合計29名)

【日 程】

時刻	活動内容	場所	留意点
13:10	生徒玄関前集合	昇降口	・長靴、防寒着、タオル2枚を持参する。
13:15	整列点呼 移動	宿戸漁港へ移動	・雨カップ、ゴム手袋、軍手、たわし、ひも、ガムテープ、食塩等を準備する。
13:30	開会行事	荷さばき施設前	・指示に従って整列する。 ・開会行事を自分たちで進行する。
13:50	作業の服装準備 作業手順説明・実演	荷さばき施設	・カップ、手袋等を着用し、準備する。 ・さばき方の手順を知る。
14:00	作業開始 ・生鮭の3枚おろし		・道具の使い方注意して作業する。 ・真剣に作業に取り組む。
15:45	後片付け(道具、作業台)		・着替えをして、閉会行事の準備をする。
16:00	閉会行事、移動	荷さばき施設前	・指示に従って整列する。 ・閉会行事を自分たちで進行する。
16:10	生徒玄関前到着	昇降口	
16:15	干し竿につるす、網掛け	2階ベランダ	・分担して、干し方作業に取り組む。
16:45	後片付け(スプラテブ等)		

【事前事後の指導】

(1) 事前の学習

- ・事前に鮭の生態やさばき方を調べる。
- ・作業を指導していただく漁業関係者とのコミュニケーションの仕方を学ぶ。
- ・昨年度の様子を収録したDVDで事前学習を行う。

(2) 事後の活動

- ・自己評価をして、感想カードに記入する。
- ・塩漬けた鮭を水洗いして干す。(新巻鮭作り続き)
- ・完成した新巻鮭を切り身にし、真空パックして冷凍保管する。
- ・乾燥させ完成した鮭とばを冷凍保管する。
- ・オリジナルラベルシールを作って貼り付け、商品として完成させる。
- ・平成25年度の修学旅行での鮭とば・新巻鮭の販売の準備をする。

# 2年 鮭とば・新巻鮭づくり

平成24年12月3日

## 真心込めサケとば作り

### 洋野中 修学旅行先で販売へ



おいしい「とば」を作ろうと、熱心にサケをさばく生徒たち

洋野町種市の宿戸中 用 生徒たちは漁業者 学旅行先の東京で生 (太田郁夫校長、生徒 に指導を受けながら、徒自ら販売する計画 79人) 2年生29人は3 真剣な表情でサケのさ だ。

日、同町種市の宿戸漁 ばさ方を学んだ。

港近くの荷さばき施設 えらや内蔵を取り出 が作っていたとばはさ でサケとば作りを体験 して三枚におろし、さ れいだったが、自分で らに身が細長くなるよ さばくのは思ったより うに切り込みを入れ も難しかった。おいし を深めた。

地元で朝に水揚げさ されたばかりのサケを使 させて完成、来春に修 待した。

岩手日報 平成二十四年二月四日



# 宿戸の漁業復興の一翼を担おう!

## サケトバ作り真剣に

### 来年、修学旅行先で販売

洋野町宿戸中2年生



さばいたサケを流水に通じる生徒

「真剣な表情でサケのさばき方を学んだ。えらや内蔵を取り出して三枚におろし、きれいだったが、自分でやらに身が細長くなるよさばくのは思ったよりうに切り込みを入れるも難しかった。おいしいとばを作ろうと、熱心にサケをさばく生徒たち」





学校行事 修学旅行 3 学年	テ ー マ	<b>S e a r c h f o r m y w a y !</b> ～修学旅行を通して、自分の道を探そう～
----------------------	-------------	---

- 【ねらい】
- (1) 旅行を通して、教育課程の履修に関わる日本経済・文化・科学・産業等の一端にふれることで、各教科にかかわる直接体験をさせる。
  - (2) 体験的な進路学習の一環として職業をテーマとした自主研修を実施し、職業観・勤労観の育成を図る。
  - (3) 規則正しい生活や安全に留意した行動及び学習訓練の直接的な場所・機会を校外生活の中で習得させる。
  - (4) 自分の役割・責任を考え、規律ある集団行動を通して、特別活動・道徳領域並びに基本的行動様式の習得・実践の場の一つとする。
  - (5) 実社会の一端を見つめさせることで、個々の社会的視野・概念を広げさせる。

- 【指導の構想】
- キャリア教育で実施してきた1学年の塩ウニづくり、2学年の鮭とばづくりの体験を関連・統合し、修学旅行の中で3年間の集大成として漁業販売体験を実施し、社会的視野を広げさせる。
- ・ 3年間のキャリア教育の体験学習で培ってきた職業観や勤労観を基に、より広い視野に立って将来の生き方を考えさせる。
  - ・ 「宿戸の漁業復興の一翼を担おう」のテーマのもと、漁業販売体験を通して、宿戸を宣伝することで復興の一翼を担う。

【期日・時間】 平成24年4月17日(火) 13時30分から15時

【販売場所】 東京都中央区 南海東京ビル1階「いわて銀河プラザ」

【販売までの活動の流れ】

1 瓶詰め塩ウニのラベル貼り作業

瓶詰め塩ウニは種市南漁業協同組合の冷凍庫に保管しておいた。その瓶詰め塩ウニを冷凍庫から取り出しラベルを貼り付けた。

2 真空パック入り新巻鮭のラベル貼り作業

3 袋詰めされた鮭とばのラベル貼り作業

新巻鮭と鮭とばは、種市南漁業協同組合の冷凍庫に保管しておいた。真空パック入り新巻鮭と袋詰め鮭とばを冷凍庫から取り出しラベルを貼り付けた。

4 いわて銀河プラザとの会場使用交渉

5 いわて銀河プラザへパンフレット送信

6 洋野町長への訪問及び意気込み宣伝

7 漁協の冷凍庫から物品を出して梱包

8 学校からいわて銀河プラザまで物品を運搬

9 梱包された物品を取り出し、販売の準備

10 学校から持参した法被やノボリで宣伝の準備

11 いざ！漁業販売体験実施！40分で完売

**岩手県 洋野町立宿戸中発！！**

私たちがとば・新巻・ウニを販売します！

販売日時

- ・日にち 4月17日(火)
- ・時間 午後1時30分から
- ・場所 いわて銀河プラザ
- ・金額 塩ウニ 1000円  
鮭とば 300円  
新巻鮭 300円

販売の様子

笑顔で話しながら商品をさばっています。



みんなきれいに仕上げました。そのあと、切り身に真空パック詰め作業を行いました。



頑張ったとば・新巻・ウニを

【販売体験までの様子、販売体験の様子】



【水上町長様へ販売を宣伝】



【会場準備前のあいさつ】



【街頭宣伝の準備】



【学校から運搬した物品準備】



【販売している様子】



【完売後の集合写真】

【生徒の感想】

- ◇町長さんを訪ね「元気に販売し、岩手は頑張って復興していることを伝えたい。完売できるように頑張る」という意気込みを伝えることができた。
- ◇会計をされていて、初めはスムーズにできないところもあったけど、だんだんできるようになってよかったし、完売することができてよかった。事前に箱などもわけられるようになってあったので、スムーズにできたと思う。
- ◇いきなり接客をすることになって緊張したけど、しっかりこなすことができた。初めはガンガン売れて、すぐに完売するんじゃないかと思ったけど、売れなくなった。そのときに、みんなで声を出してお客さんを呼び込んで完売することができた。完売したときはすごくうれしかったし、達成感があった。
- ◇販売体験は初めて宿中でやってみたけど、完売できてうれしかった。予定よりもかなり早く完売したから驚いた。路上で宣伝していて、「いってみよう」とか「買いに行こう」という声が聞こえてうれしかった。
- ◇街頭宣伝は恥ずかしかったけれど、すごく楽しかった。通った人たちの中に話しかけてくれたり、笑顔であいさつしてくれたりする人もいて、とても優しかった。仕事の大切さ、楽しさなどを学べた、とても貴重な販売体験だった。
- ◇外でお客さんに「いらっしゃいませ」「ウニ売ってます」「鮭とば安いですよ」などと言っているとき、若い人は素通りしていき、都会は冷たいなあと思ったけど、おばちゃんやおじいちゃんたちはみんな耳を傾けてくれて、中には店の中に入れてくれる人もいた。うれしかった。店から出てきたとき、「買ったよ」「盛岡の方から買いに来たよ」と言ってくれて、とてもうれしかった。



3 学年	ねらい	野田村の復興を考え、地方自治を学ぶ
社会・総合		「野田村都市公園（メモリアルパーク）」構想をもとに、具体的な設計内容について野田村の一員として主体的に関わり考える。

【題材】「メモリアルパークの設計アイデア」を発信しよう

（野田村都市公園づくりを通じた学習）

【学習対象】絆 ⑥郷土

郷土に愛情と誇りをもち、美しい自然、伝統行事・芸能、温かい人のつながりのある社会・安全な街を願い、未来の担い手として街づくりや県づくりに関心をもつことができる。

【復興教育の視点】「ひとづくり」～郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成～

昨年の3年生が取り組んだ「野田村を考える～復興計画を提案しよう～」をさらに発展させ、総合と社会科において「ふるさと野田の復興を考える」について学習する。

【実践の概要】

- 昨年度の取り組みの振り返りと今年度の位置付けの確認  
復興むらづくり計画及び都市公園整備計画の理解  
（村担当課と設計コンサルタントからの説明、  
取り組み内容・計画の確認）
- アイディアコンテの作成
- ワークショップ①による交流・協議  
＜村・・・都市計画への反映 → 国へ提出（第1次案）＞
- ワークショップ②による交流・協議
- アイディアのまとめと発信  
・計画案の提出（具体案への反映を目指した計画の提案）  
・アイディアの交流（小学校、高校、地域住民、関係者）



【実践の詳細】

#### 第1ステップ

- 地方自治を学び、村の復興を考える（社会科）
- 村の計画、設計コンセプトをもとに都市公園についてのアイデアを考える
- （夏休み課題）  
「アイデアコンテ」の作成



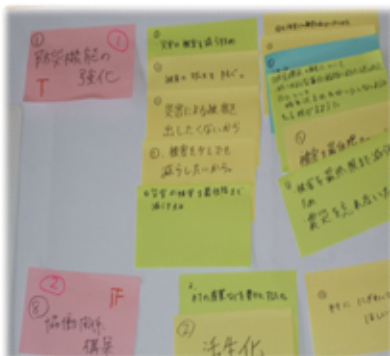
#### 第2ステップ

- 第1回ワークショップ（各自の考えの交流と提案に向けたワークショップ）
- 復興むらづくり計画、公園づくりプランの説明を聞く
- 大学の先生、設計コンサルタントとともに、ワークショップに取り組む
- アイディアを集約、分類・整理しまとめる



#### 第3ステップ

- 第2回ワークショップ（村が提出した都市計画と、第1回ワークショップから見えてきた課題に基づく協議）
  - 整備方針、公園機能、ゾーンに沿った分類と整理
- #### 第4ステップ
- アイディアのまとめと発信
  - プラン案の提出（具体案への反映を目指した計画の提案）



岩手日報 平成24年8月28日

## 【授業の展開】 第2ステップ…第1回都市公園ワークショップ

〈本時の目標〉都市公園のテーマに沿って、その機能について意見を交流することができる。

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導入	1 教師の話聞き、前時の学習内容を想起する。	
展開	2 教師とコンサルタント会社の方の話聞き、学習の見通しをもつ。 自分たちの選択したテーマにもとづき、公園機能について意見を交流し合おう。	
	3 アイディアコンテをもとに各自の考えを発表・協議し、グループの提案をまとめる。	◆付箋にキーワードを書き込み、機能ごとに分類する。 ◆模造紙を示しながら発表する。
	4 代表生徒がグループの提案を発表し合う。	
	5 意見交流・提案内容の総括を岩大・三宅教授から聞く。	
終末	6 教師とコンサルタント会社の方から、提案内容が村の都市計画作り、国の政策資料となることを聞き、今後の地方自治学習の見通しをもつ。	

## 〈生徒の感想〉

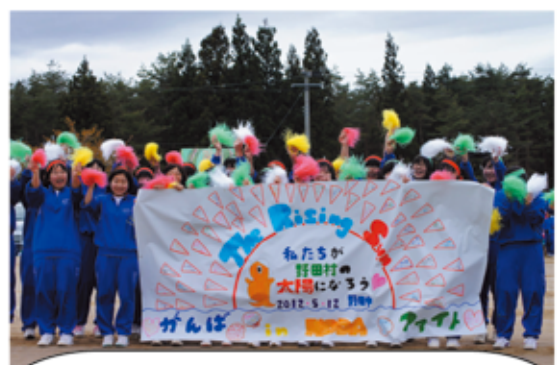
・お年寄りや子ども、大人も気軽に訪れ、休憩や運動のできる公園にしたいと思った。大学の先生や専門家の方の話聞いて意見を交流する中で、自分たちのアイデアが村や国につながると実感した。

・野田村の自然を有効活用したいと思い、太陽光発電や水力発電などの自然エネルギーと融合させた公園を考えた。村の一員として、知恵を出し合う話し合いは有意義だった。

・防災機能強化に着目し、津波の高さがわかる時計塔を設置し、その電力は太陽光発電としたいという発表を聞き、公園に何を置くかも大切だと思った。

・アイデアを出すのは難しかったが、村民が笑顔で過ごせるような公園ができるように頑張った。

〈まとめ〉 生徒達は「私たちが野田村の太陽になろう」を合い言葉に、復興に取り組む大人たちの背中を見ながら、「自分たちにできることは何か」を常に考えてきた。そして今回の学習を通して村の復興に参画し、村を担う意識が高まってきている。辛い経験をそのままにせず、生徒達が希望をもち新たな未来を創造する学習活動を、本校の復興教育として今後も取り組んでいきたい。



〈保護者や地域の声〉 将来、野田村を支える中学生がこうした学習に取り組むのは価値あることだ。子供たちの希望を叶えられるよう大人も支えていきたい。



特別活動 第2学年	ね ら い	東日本大震災の被害の大きかった方々の思いや痛みを理解し、自らの生き方を考え、これまでの生活への感謝の気持ちや思いやりの心を育てる。
--------------	-------------	---

## 【題材】

「今、自分たちにできること」

## 【対象】

二戸市立御返地中学校 第2学年 18名（男子7名 女子11名）

## 【実践の概要】

本校は内陸部にあり、東日本大震災の直接的な被害を受けることはなかった。生徒は震災の情報をテレビや新聞などに頼っている。そのため、どこか遠い別世界で起こった出来事のような感覚をもっている生徒もいた。

今年度の復興教育では、震災の被災者及び救助活動に参加された方からの話を聞くとともに、実際に被災地に出向いて現状や被害の大きさを肌で感じ取ることができた。その中で、被害の大きかった方々の思いや痛みを理解し、思いやりの心と、当たり前の日常生活への感謝の気持ちが育むことができた。今後、自分たちにできることは何なのかを考え、実践していく態度を育てることを通して、これからの自己の生き方を考えさせていきたい。

## 【実践の詳細】

## 1 講話「津波体験を語る」

（震災当時や震災後の苦労など、被災者の痛みや思いにふれる。）

## 2 講演と実技「救助活動を通して思うこと」

（震災救助活動に携わった方の様々な思いにふれる。）

## 3 被災地学習①「被災地を見る」（野田・田老）

① 三陸鉄道の震災列車に乗車し、沿岸地域を視察。

② 宮古市田老地区にて、被災状況の説明を聞く。

## 4 講演「知っておきたい放射能の話」

（放射線の基礎的な知識を学ぶ。）

## 5 被災地学習②「被災地での体験活動」（宮古）

① 浄土ヶ浜での海岸清掃を行う。

② 宮古市藤原埠頭にて、がれき処理の現状を学ぶ。

## 6 発表会「これまでの被災地学習を振り返って」

（これまでの学習をまとめ、ボランティア状況を調査する。）

## 7 学級活動「自分たちにできること」

（これまでの学習を振り返り、自分たちにできることを実践する態度を育てる。）

## 8 実技「しめ飾り作り」


（被災された方々を思い、自分たちでしめ飾りを作り、被災地に送る。）

## 9 訪問学習「復興への歩み」

（岩手県復興局を訪問し、復興について学ぶ。）



【授業の展開】

	学習内容・学習活動	指導上の配慮事項と評価
導入	1. これまで、東日本大震災の学習を振り返る。 2. 課題を設定する。 「今自分たちにできることを考えよう」	・震災の現状、復興の状況、被災者の心をもう一度、想起させる。
展開	3. 個人の考えをまとめる。 ①被災した地域のために自分たちにできること。 ②震災をきっかけに自分たちが見つめなおさなければならないこと。 4. 話し合い、発表 班の中で、意見を出し合い、班の考えを学級で発表する。	・被災地の現状を考えながら、特別なことではなく、日常の中でできることへ目を向ける。 ・心の面についても考えさせる。 ・仲間の意見を認め、自分の考えを分かりやすく伝える。 ・自分の意見をまとめ、相手に分かりやすく伝えることができる。
まとめ	5. 学級で取り組んでいくことを確認する。 6. 感想を発表する。	

1 学級での具体的な取り組み

- ・節電活動
- ・リサイクルBOXの設置と回収
- ・新聞記事の紹介

2 生徒の感想

- これから、私たちは被災地のことをもっと知っていかなければならないと思います。それに、東日本大震災のことも絶対忘れてはいけないと思います。今は、家族・友達のことを大切にして、普通の生活が送れていることに感謝したいです。(R女子)
- 被災地見学で実際に被災地に行った時、まだ、がれきの山がたくさんあるのを見て、本当に驚いた。少しでも、早くがれきの山がなくなってほしいし、被災した人達が普通の生活を送られるようになってほしい。(N女子)

3 まとめ

- (1) 被災した方々の思いを分かろうと、思いやりの心を持って、自分たちのできることは何かを話し合うことができた。
- (2) 日常生活にも目を向け、普段の生活への感謝と自らの行動を振り返ることができた。





1 本校の「復興教育」の視点

【本校の復興教育の目標】

- ・人としての在り方・生き方を考え、生命を尊重する心を育成する
- ・他者に対する思いやりや助け合いの心を養う
- ・災害から命を守るために必要な能力や資質の向上を図る
- ・郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する

岩手県民として震災津波被害と向き合い、自らの在り方、生き方を考えさせること、郷土の復興に力を注ぐ人々から生き方、考え方を学ばせること

と等、昨年からこれまでの指導内容に以下の復興教育に関連した内容を加味し実践してきた。本校では今年度の重点目標を「災害復興に携わった方から学ぶ」とし、3. 11に何があったのか、実際に被災された方・支援に携わった方の体験から学ぶ機会を設け、それらの方々からの復興体験談を伺うことにより、体験したからこそ伝えたい思いを汲み取り、同じ岩手県民としての在り方や自分自身にできることを改めて考える機会を設けてきた。

総合的な学習の時間の主な学習内容（平成23年度、平成24年度）

学年	学年テーマとねらい(一部)	主な学習内容	
		平成23年度	平成24年度
第1学年	「自分自身を見つめる」 ・郷土に目を向け、自分と自然や地域とのかかわりを見つめ、生き方を考えさせる ・学び方の基盤づくり	○ハートフル1日体験学習 軽米豪雨災害(平成11年)の被害状況、人々の対応や復興の様子を調査し、郷土の発展のために力を発揮できる基盤づくりを行う	○職場訪問学習 町内の事業所で働くことについて取材活動を行い、まとめ・表現活動として発表する ○野外炊事 災害時にも対応できる野外での炊事を体験する
第2学年	「体験・他者から学ぶ」 ・地域に働く人々等のかかわりから、他者の多様な生き方、考え方を学び、自分の在り方、生き方を考えさせる	○職場体験学習 ○宿泊研修(野田村) ボランティア活動をとおして被災地の現状やニーズを知り、自分達にできることは何かを考えていく	○職場体験学習 町内で5日間の職場体験学習を行う ○宿泊研修(久慈市/盛岡市) 被災地の事業所で現在までに至る話を聞き、盛岡の事業所で復興支援の取組を取材し、県民として忘れてはいけないことを学び、自分達の復興計画を考え、表現活動で伝える
第3学年	「生き方を考える」 ・これまでの学びをいかし、振り返りながら、将来の自己の生き方を深く見つめさせながら追究させる	○先輩に学ぶ(修学旅行) 在京の先輩の生き方、考え方、郷土への想いに触れる ○おかげさま活動 郷土、被災地のためにできることを考え、実践する	○班別自主研修(修学旅行) 都心での震災復興に関するテーマについて取材活動を行い学びをまとめ表現活動で伝える ○おかげさま活動 郷土のために自分ができる奉仕活動を考え実践する

2 復興教育の視点で取り組んだ実践

本校から車で一時間の距離にある県北の沿岸被災地である久慈では震災被害は沿岸部だけに限られているということであったが、海岸沿いに位置していた国内唯一の『地下水族科学館もぐらんぴあ』は壊滅的な被害を受けていた。元館長の宇部修氏に講演をお願いし、職場を失い家族を抱えて将来の展望が一切持てなくなった苦しみや、そんな中で壊滅した水族館の中から震災を生き延びた生き物が発見され一筋の希望になったこと、『さかなクン』をはじめとした全国からの支援と絆で現『まちなか水族館』が建ちあがったことなどをお話しいただき、改めて震災被害を身近に感じ、自分たちにできることは何かを考えることができた。また、さらに重大な被害が出ていた隣の野田村で長期に渡る支援を行っている『チーム北リアス』の共同代表で八戸高専の河村先生より、支援者(しかも同じ東北内陸部の人間として)の立場からのお話を伺うことができた。野田村には昨年、現3年生が野田村復興プロジェクト『糸半 ～49人の笑顔で、野田村を元気に』でがれき撤去などのボランティア活動に取り組んだ縁もあったので、生徒たちはより身近なこととして受け止め、次回自分たちが支援を行う際に心がけなければならない事柄を記憶にとどめていた。

▼復興教育講演会

全校：総合的な学習の時間

題材

『東日本大震災から生まれたもぐらんぴあ・まちなか水族館』

講師

まちなか水族館代表 宇部 修氏

<ねらい>

・3.11に何があったのか、被災された方の体験から学ぶ。実際に震災被害に遭われた方からの復興体験談を伺うことにより、体験したからこそ伝えたい思いを汲み取り、沢山の方々からの支援の存在やこれからも長期に渡る支援が必要なことなど同じ岩手県民としての在り方や自分自身にできることを考える機会とする。【命・絆】



▼生徒の感想

・私は多くのことを知りませんでした。「もぐらんぴあ」のことは新聞などで見ていたことはありましたが、詳しく知りませんでした。ですが、今日の講演を聞いて絆の深さを身に感じることができました。久慈を襲う津波の映像を見たとき、胸が熱くなりました。こんなにも、恐ろしいことが、自分のいる岩手に起こっていたことを知ったからです。

でも、そんな中でも、「もぐらんぴあ」のみなさんは「さかなクン」や地域の方々と共に水族館を再開されて凄いなと思いました。また、支援をして下さった全国の方々の心が、こんなにも温かいものだと知って、自分にも何かできないかと思いました。秋には、宿泊研修があるので、そこで被災地を助ける活動をしていきたいです。今日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。



▼復興教育講演会

全校：総合的な学習の時間

題材

『北からの支援・野田村でのチーム北リアスの活動』

講師

八戸高専総合科学科長 河村信治氏（北リアス共同代表）

<ねらい>

・震災直後から被災した野田村を長期に支え、支援を現在も継続して行っている『チーム北リアス』。本州最北青森県から関西にまでに渡る広範囲のメンバーが一つの思い出つながら、紡いできた活動と支援を行う際の心がけを学ぶ。【命・絆】

▼生徒の感想（一部）

・僕が今日の講演で心に残ったことは2つあります。一つ目は『滅私奉公』ではなく『活私開公』をしようということでした。この言葉を聞いたことはありませんでしたが、聞いたときすぐに共感することができました。被災地や被災者を助ける立場に自分が立ったとき、『滅私』では絶対に長続きしないことや、長続きしない一時的・短期間の支援では被災者の本当の役に立てないことが頭に浮かんだからです。二つ目は被災した市町村を復興・発展させるためには、『よそ者・若者・馬鹿者』が必要不可欠だということです。初めは、よそ者・馬鹿者（外部からの視点）が必要だということはわかったけれど、何故、経験のない若者が必要なのかかわからず、ずっと考えていました。でも、お話を聞いて、僕たち若者の力も他の者に考えず必要だということがわかりました。最後にチーム北リアスの人たちは長く自主的に活動していることを尊敬します。目標としたいです。



▼朗読鑑賞会

全校：国語科

題材

『父と暮らせば』井上ひさし

講師

樹原ゆり氏 高橋和久氏

<あらすじ>

・「うちははあわせになつてはいけんのじゃ」広島原爆で生き残った美津江は、死者に対する負い目から自分を責め続ける生活を送っている。そんな娘を励ます父・竹造も実はもうこの世の人ではない。辛く悲しい体験を忘れずに後世に伝えることを生かされたことへの使命とし、自分の心のままに生きることを娘に伝える竹造の言葉は『生きることへの応援歌』ともとれる。新たな一步を踏みだす美津江。

<ねらい>

・今、被災者達が抱えている心情にも通じる題材であり、大きな災害に遭われた人々の苦しみに共感的理解を図りながら自分らしく『生きていくことの大切さ』を学ぶ。【命・絆】



▼生徒の感想（一部）

・樹原ゆりさんの朗読に心を打たれました。「朗読」なのに涙を流されていたことに驚きました。声だけでなく、表情もその時々で変化して娘の気持ちが伝わってきました。（中略）東日本大震災と照らしあわせるとたくさん被害を受けた方々がいて、「父」の考えの通り、生きている私たち自身が精一杯毎日を過ごしていけたらいいと思いました。

・樹原さん・高橋さんの朗読から家族の絆、戦争の恐ろしさなど沢山のことを学び、深く考えさせられました。特に「自分だけが生き残ってしまった私はここにいてはいけない人間なんだ」と思う娘に対し、父が優しく、そして力強く声をかけた場面では涙が出てしまうほど二人の思いが伝わってきました。東北に住んでいる私達は国語の教科書の中でしか、戦争で被災された方の思いを知ることができませんでしたが、今日の朗読会での声の演技が心にジーンと残りました。貴重な機会をありがとうございました。



### 3 復興教育の視点で取り組んだ学年・班での実践

昨年度から取り組んでいる『キャリア・復興教育』を踏まえ、各学年でも新しい視点での組み替えを付加してきた。

#### (1) 第2学年の実践

##### ▼宿泊研修 初日：久慈で復興講演会(三陸鉄道・久慈漁協)二日目：盛岡市で職場訪問・復興支援取材

2学年では、昨年度郷土軽米町が受けた災害やその復興の過程・町のために尽くした人々の努力の営みについて総合的な学習の時間で学習し、その学びを基盤に今年度は、自分たちで体験し、自分にできることや生き方を考えさせることにつなげていくことを目標としている。生徒たちは全校復興教育講演会で学んだ久慈の状況を実際に目で確かめたいとして宿泊研修の目的地を増やし、『まちなか水族館』の応援も兼ねて宇部さんとの再会を果たすことができた。中学生のボランティア活動は受け入れてもらえなかったものの、今もなおがれきが残る工事車両が行き交う『もぐらんぴあ』跡地を訪れ、講演会で話された被害や避難の状況を実際に確かめ、当時のすさまじい様子を体感することもできた。お礼の気持ちを込めて学年から合唱を送り、喜んでいただくことができた。また、講話の中で久慈の人々の願いが三陸鉄道の再開復興であることを知った。地域の生活を支える足として震災後わずか5日で運転を部分再開された三陸鉄道の運行部の方から今回お話を頂くことができた。三



陸鉄道北リアス線運行部部長 金野淳一氏でなければ伺えない、三陸鉄道の歴史、地域の方に根差した存在そのものが『希望』になりえる会社のあり方、意識と誇りの持ち方・地域の方々の暮らしを守ることを学ぶことができた。生徒たちからは「職員の方々から感じられる強い使命感」や、「ドラえも



んなど様々なキャラクターたちが文字通り手をつなぐ『てをつな号』ラッピング車両が示す多くの方々の善意の絆など、「たくさんの方々からの支援や思いが今日の三陸鉄道を動かしていること等が強く感じられた」と感想が多数寄せられた。来年度の東京修学旅行では、その三陸鉄道が舞台の『NHKテレビ小説・あまちゃん』をぜひ取材したいという希望を持つ生徒も出てきた。復興支援にかかわる学びの継続で、次に何を学ぶべきかを考え自主的に学びの目標・希望を持つ生徒が現れた。

##### ▼文化祭・総合的な学習発表(表現活動) 【資料1】第2学年「呼びかけ台本」

文化祭では久慈での復興教育講話で強く心に刻んだことに加え、宿泊研修二日目の盛岡班別自主研修で12の事業所(報道関係：TV局②・FM局・新聞社・出版社、警察、消防、県庁、市役所危機管理課、電力会社、ホテル、理美容)で行った職場体験や震災復興支援活動について取材を通して学んだ内容を、学年全員参加の表現活動として発表した。



##### 題材『我ら岩手人～体験から学ぶ～』

<ねらい>

- ・震災被害に遭われた方々・復興支援に携われた方々から体験談を伺い、体験したからこそ伝えたい思いを汲み取り、自分たちにできること、県民としてあり方を考え、学びを伝えていく。

<あらすじ>

- ・朝のJKALニュースで、軽米中学校2学年が盛岡で班毎に職場体験を行ったことが報じられる。アナウンサー、リポーターからインタビューを受ける形で発表が進む。ある班の「一番伝えたいことは新聞社の記者の方のコメント『遺族がいる限り、震災は終わらない』という言葉。今自分たちにできることは震災の被害を子孫に伝え次の犠牲者を出さないこと」最後は学年全員で呼びかけ。





【資料1】第2学年「呼びかけ台本」

1	平成23年4月8日 私たちの入学式	6	自分を見つめ
2	東日本大震災の余震で その日は朝から停電でした	7	郷土について学び
3	これからの3年間は復興の3年間	8	自分自身の生き方を考えよう
4	将来 復興を支える人間になるために	9	これまでさまざまな学習をしてきました
5	被災地や岩手のよきサポーターになるために	10	今年 7月
17	中学校生活 3年間の折り返し地点	39	実際に「まちなか水族館」や「もぐらんぴあ」へ行きました
18	ちょうど節目に当たる大きな行事	40	自分の目で実際に見ること
19	宿泊研修	41	自分の足で現地へ向かうことが大切なのだと感じました。
20	一日目は久慈を訪ねました	42	まだ がれきも残る場所で
21	被災された方々からその時の状況と復興へ向けての夢みについてお聞きしました	43	『明日という日が』 の合唱をおくりました
22	久慈市漁業協同組合 理事 松野さん	44	歌の歌詞に 私たちの思いをたくしました
23	すべてを失い 大きな失望の中	45	盛岡の班別自主研修
24	負けない！立ち直る！と奮起し	46	時間を意識しながら班員で協力して行動できました
25	3月30日には市場を再開させたお話	47	訪問先では震災の様子や復興に向けてのお話を聞くことができました
26	被災した冷凍施設の 800トンもの魚 3億円分を	48	さまざまな方との出会い
27	保健所とかけあい 山に埋める決断をしたお話	49	震災復興について、より深く考える機会になりました
28	1000名の漁業組合員を思い	50	数え切れないほどの仲間との思い出
29	10年計画で 必死に復興計画を進めているそうです	51	学年の絆を一層深いものにすることができました
30	三陸鉄道 北リアス線運行部 金野 淳一さん	52	いよいよ中学校生活の折り返し
31	明治三陸大津波から88年	53	後半戦のスタート
32	人々の熱い思いで開業した三陸鉄道	54	軽米中学校をよりよい学校にするために
33	27年間地域の大切なあしとして運行してきました	55	私たちは一致団結して取り組んでいきます
34	東日本大震災での広範囲に壊滅な被害をうけながら	56	リーダーとして
35	わずから日後 部分的に運転を再開したそうです	57	先輩として
36	すべては 地域の人々の方になりたい という思いからでした	58	まだまだ課題はあるけれど
37	人々の希望をつなぐため、全線開業に向けて頑張っています	59	進化し、改善しながら
38	1学期に講演いただいた宇部さんとの再会	60	突き進んでいこうと思います。

(2) 第3学年の実践

▼昨年度から続く「復興絆プロジェクト」「おかげさま活動」

私達は、岩手の軽米から修学旅行に来ています。今日は、浅草寺のこの場所をお借りして、全国のみなさんに、お礼をしにきています。私達が、学校で毎年育てているチューリップの球根を岩手の復興の絆として、プレゼントしています。これからも、岩手をよろしく願います。(H23東京修学旅行浅草寺で)



昨年度の東京への修学旅行で、当時の3年生が大震災で岩手県へ寄せられた支援のお礼の気持ちを届けたいと、自分たちで育てたチューリップの球根を配る取組を行った。それがご縁で関東地方の何人かの方々との手紙の交流が続いている。今年度は、そのお一方に現3年生が修学旅行の班別自主研修で初めてお目にかかることができた。その後、美味しい梨が学校に届けられ、交流が継続している。この「おかげさま活動」と呼ぶ感謝の気持ちを表すボランティア活動には、主に3学年が毎年自分たちで考え取り組んでいる。郷土軽米への感謝の気持ちを表すため、今年度はワークショップで町の課題を考えて作業内容を決定した。現軽米町長さんに講演をお願いし、疑問やこれからの展望を質問して理解を深めた。その後、環境・福祉グループに分かれ、河川敷の清掃や保育園/社会福祉協議会への訪問・交流に取り組んだ。



4 まとめ

震災が起きた昨年度は、今現在も苦しい生活を送っている同世代に思いを馳せ、当たり前のできる有難みを改めて感じているという言葉が生徒たちからたくさん聞かれた。今年も様々な機会を通して、『気づき』を学ぶ生徒の姿が見られた。今後も長期に渡って必要とされる復興支援の担い手としての資質を備えた「ひとづくり」を目指し、今まで取り組んできた教育内容の復興教育の視点での見直しや取り組みでの深化を目指して取り組んでいきたい。